



恋愛ダウンロード1

その日は突然やってきた。いつものように携帯電話で着メロをダウンロードしていたケンはこの頃いつも使っているサイトのメロディがちょっと飽きてきていた。

「なんか、もっと面白いメロディがあるところないかな～」

そう云うと携帯電話で着メロを配信しているサイトを探し始めた。少しして検索サイトで「恋、愛、彼女など、何でもお好きなモノをダウンロードできます。」とタイトルに書かれたサイトが眼に入った。

「恋、愛、彼女だってえ？　ほんとにかよ？」

そう云いながらもそのサイトにアクセスしてみることにした。

サイトの説明を読んでもみると確かに「恋、愛、などの感情をダウンロードして貴方の好きな人にデーターを送信、相手がメールを開封した瞬間にお相手の方は貴方に送信したデーターと同じ感情を抱くようになります。」と書かれている。

「へっ。うっそみて～　でも料金はいくらなんだ？」

続けてサイトの説明を読んでもみるが、料金の説明が中々でてこない。　そればかりかダウンロードできるデーターの一覧が出てくる始末である。

「一体全体いくら取る気なんだ？　それとも効果が無いジョークサイトなんでただって訳？」

試しにダウンロードしようとしてみると、説明文がでてきた。

「ようこそ。　メンタル・ダウンロードへ。　こちらでは御客様のお好みの「感情」をダウンロードできます。　なお一度ダウンロードしたデーターの返却はできません。　またデーターの効果時間によって料金が違っております。　お試しの1分の場合は無料。　1日の場合は1000円、1週間の場合は長期割引が効きますので5000円、以後1週間毎に4000円となっております。　但しこのデーターはあくまでも「仮の感情」ですので、悪用なさないでください。　悪意のある御使用の場合は相応の措置を取らせて頂きます。」と記載してあった。

「ふ～ん、面白そうだけど。どうやって使うんだ？」

試しに「恋」を選んでお試しをダウンロードしようとすると、同じ画面に説明がでてきた。

「ふむふむ、ダウンロードしたデーターを相手の携帯電話に送信する。　相手が開けばデーター通りの感情を持つってわけか。なるほど。」

そう云うと携帯を操作して「恋」のお試しデーターをダウンロードした。ダウンしたデーターを開いてみようとするが、開くことができない。そう大きなデーターでは無いがパソコンへの転送もできない。

「いったい、どんなデーターなんだろう？　ところでっ、誰に送るかな？」

ケンは大學生なのでサークル仲間はあるが、試しでも「恋」なんて男には送りたいくない。　そこでサークル内で女の子を適当に選んでメールに添付して送信してみた。　送信して5分後、突然メールの送信相手から電話がかかってきた。

「もしもし、ケン？」

「ああ、そうだけど？　（どうしたんだ？　効果があったのかよ？）」

「あのねえ～ちょっと貴方の声が聞きたくなったのよ。　ダメ？」

と、いかにもあまったる～い声で話してくる。　いままでサークルで何回か会ってはいるがこんな声を聞いたのは初めてだ。

「いや、そんな事はないけどちょっとビックリしちゃってさ。　そっちはいま何してんの？」

「あ・な・た・と電話。　ねえ、今夜会えるかな？　食事でもどう？」

「当然OKにきまってんじゃん。で、どこ行く？」

「え～っとね・・・　あれ？　あたしなんでケンに電話してんのかしら？　なんか用事でもあったのかしら？」

「（ちえ、効果が切れたのか。）ん、なんかあったのかな？」

「ごめんね。　ちょっと忙しいから切るね。」

そう云うと携帯は切れた。

「へえ～、こりゃすごいぜ。　ホントに効果があるとは思ってもみなかったぜ。　しかし、効果が切れた時の変りようが可らしいこと。」

急に真剣な顔になって考え込んだ。

「このデーターを使えば彼女だってあつという間にできんじゃん。期限付きとは云え、完全にメロメロな彼女ができちゃうんだからな。」

「そうだ、データーはどうなったのかな？」

そう云って携帯に保存したデーターを探してみるが、見つからない。

気になって先ほどのサイトに行ってみると、「ダウンロードしたデーターを御使用になれるのは一度だけです。一旦メールでどなたかに送信されるとデーターは自動的に消滅致します。」との一文があった。

「うん。確かに一回っきりしか使えないんだな。」

そしてその日は夜も遅いので、余り考えずに寝ることにした。

大学にいてみるとサークルの仲間が話し掛けてきた。

「いよう、ずいぶんとモテルんだな。」

「何のことだよ。」

「隠すなって。昨日ミコから電話があつたって話じゃねえかよ。　それもミコのやつデート中だったらしいぜ。　他の男とデート中にいきなりケンに電話したんで、カレシ相当御立腹だったらしいぜ。」

（へえ～それで慌てて電話を切ったのか。なるほど、それじゃあ、カレシも怒るのもムリネエや。）

「いやあ、そんなでもねえよ。　こっちはアパートでゲームしてたってのに、おかげでラストまで行けなかったんだぜ。」

と、嘯いてみせた。

「ま、いいけどね。」

話題はその後別の話になり授業も始まったことでそれっきりになった。

昼休みにになり先ほどの友人と学食で昼食を取ることにした。　学食はいつもの通り混んでいて中には　昨日メールを送信

したミコの姿もあったが、避けて座ることにした。
「あの、ここ開いてますか？」
ちょうど二人分の空きが見つかったのでそばに座っていた、女の子に声をかけると、
「ええ、どうぞ。」
と、答えが返ってきたので「どうも。」と云いながら席に腰を下ろすと同時にその子の顔をみて驚いた。いままで学内にこんな可愛い子がいたなんて。なんで気が付かなかったんだろう？ 少しウェーブのかかった髪、パチリとした瞳、そして服の上からでも判るスタイルの良さ。なぜ気づかなかったのかが不思議だった。
「混んできますね。」
「そうですね。」
「いつもこちらで食べてるんですか？」
「今日はお弁当を作れなかったの。」
(なるほど、普段は弁当を持ってきてるのか、どうりで学食じゃ会わないはずだぜ。ところで、どこの学部なんだろうな？)
「それじゃ。」
そう云うとその子は食べ終わった食器の入ったトレイを持って席を立った。
「すげえ、可愛い子だったな。」
「そうだな。どこの学部なんだろうな。」
「聞きゃーよかったじゃん。」
「惜しいことしたぜ。」
「サークルの女子に聞いてみようか？」
「そうだな。女子同士で情報持ってるかもね。」
「で、情報もらってどうすんだよ？」
「ちょっと、興味があるからね～」
(情報もらったら、何とかメアド聞き出して、例のデーターを送信すりゃばっちりだぜ。たとえ友達でもこれだけは云えねえや。)

恋愛ダウンロード2

それからサークル仲間の女の子に聞いたところほど無く、その子に関しての情報は手に入れることができた。 もっとも居酒屋に2回ほど通わされたことは言うまでもない。その子は理学部の学生で名前は「立花理子」というらしい。 それまでは理学関連の授業はサボり気味だったが、退屈なのを我慢して出席するようにしてから、1週間。 何とか見かけることに成功した。その後も何度か教室で顔を合わせてから勤めて自然に知り合うふりを近づいていった。 だが理子はいつも授業が終わるとそそくさを実験室に籠るか、他の教室に行ってしまう。 中々声をかける切っ掛けがつかめない。そんなある日チャンスはいきなりやってきた。その日も授業が終わって教室を出ようと準備を始めた理子が立ち上がった瞬間に閉めていたはずの、かばんが開いてケンの前に彼女の文房具が散乱したのである。

「あっ!？」 小さく彼女が言った。

「大丈夫。大丈夫。」

何が大丈夫なのかは判らないがケンは散乱した文房具を拾い集めて彼女に渡した。

「ありがと。 助かったわ。」

「い〜え〜、ところでこれから忙しいの？」

「いいえ、今日はお家に帰るだけ。」

「じゃさ、お茶でもどう。」

唐突な誘いではあったが、いままで軽い会釈などで挨拶はしていたから、大丈夫だろうと思い思い切ってみた。

「そうね・・・いいわよ。」

そう云って理子はコクンと頷いた。

(よっしゃ〜、あとはメアドを聞き出せば完璧だぜ)

そう、ケンは例のデーターを既にダウンロードして携帯電話に保存し、あとはターゲットにした女の子に送りつける準備を済ませていたのである。 そして既に1日データーを何人かの女の子に送信しては、1日彼女としてデートしていた。

だが、理子用には1週間データーを用意していた。1週間彼女にしてやろうと企んでいたのである。

そしてとうとうメアドを聞き出すことに成功した。

別れてから自分のアパートに戻ると先ほど聞き出したメアドに宛ててメールを送信した。

程なく理子から電話がかかってきた。

「はい。もしもしケンです。」

「理子です。 ねえ、これから会えないかしら。」

「いいよ〜(やったぜ〜)。 で、どうする？」

「これから貴方のアパートへ行ってもいいかしら？」

「もちろん!」

そう云うと住所やら近所の目印やらを電話で事細かく伝えた。

予想通りほぼ1時間で彼女はケンのアパートに着いた。

そして理子をみると目は潤んでおり、ケンに恋心を抱いているのは容易に見てとれた。

「ねえ。」

そう云うと彼女は身に付けているものを少しずつ外し始めた。ブラウスを取ると可愛いフリルの付いたブラジャーが現れ、理子の発達した乳房を隠していた。 そしてスカートに手をかけると同時にケンは抑えきれずに理子をベッドに押し倒し乱暴に脱がせ始めたが、「恋」データーが効いているので理子は当然逆らったりはしない。 そしてケンは乳房、腹、理子の敏感なところの順番に愛撫していく。理子は十分に感度が良すぎるほどだった。そして二人は夜中中ほとんど寝ないで貪りあい、明け方近くになってようやく眠りについた。

「ねっ、起きて。」

理子の声で目を覚ますとテーブルの上には簡単だが朝食の容易がされていた。

「おはよう。」

「おはよう。 今日は何時限あるの？」

理子は早速今日の授業を聞いてきたのある。

「えっ? 確か3時限かな？」

「じゃあ、お弁当作って正解ね。 はい。」

「えっ? お弁当作って？」

「授業はちゃんと受けなきゃダメよ。 あたしは午後からの授業しかないからお部屋片付けたら行くわね。」

そう理子はケンの彼女なのでケンにいい方向に行つて貰いたいとおもひ、昼食まですでに準備済みなくらいのお節介好きであった。

(あちゃ〜 こればっかりは判んないからな〜 1日データーにしときゃよかった!)

と思ったときは既に遅い。 理子はアパートから出る時に小さく手を振るとアパートの扉を閉めて掃除を始めたらしい。

。 「いよ、おはよ! あれ弁当なんか持ってきたちゃって、相手は誰だよ？」

「なんで相手なんだよ!」

「おまえがそんな可愛い包み方するもんか。」

そうお弁当は丁寧に小さなお弁当包みで可愛く蝶結びにして包んであった。さらに箸も箸入れに入つて可愛くまとまっていたのである。どうみても男の作った弁当ではない。

そして昼食時間。ケンはお弁当を開いて思わず閉めた。 お弁当の上には古典的にハートがある。 こんな弁当恥ずかしくて誰もいないところで少なくともハートだけは食べなければ。

これから1週間そういう生活が続くと考えただけで少々ウンザリする。 まだ大学生でまだまだ一人の女の子に決めるつもりはない。だが、それもデーターを送信した自分の責任である。 サイトを見てみたが、いまのデーターの効果が切れるまで次のデーターを送っても効果は出ない。実際に「嫌悪感」というデーターもあるがいまは使えないし効果もない。仕方が無いので諦めて1週間を過ごすことにした。実際顔もスタイルも申し分無いし、お節介好きのところと嫉妬深いを除けばいい気分で過ごせるのである。

そうこうしてはや時間は過ぎ、そろそろ1週間になろうかという時間が近づいた。 ケンはこの瞬間を待っていた。そしてとうとうその時間になった。理子は台所で洗い物をしている。

「やった〜!」

と、彼は叫ぶが今までの子と様子が違う。 覚めたような感じがしない。まったく雰囲気が変わらないのである。それでは困る。次のターゲットも既に決めていてメールを送る準備は済んでいるのだ。だが理子の効果が切れない限り実行することはできない。ケンは恐る恐る聞いてみた。

「理子、何かヘンな感じはしない？」

「うん、べつに何ともないよ。」

まだ効果が続いているのだろうか？ ケンは気になって再度サイトを見てみた。そこには最後の1行にこんな一言が記載されていた。

「まれにデーターの効きに弱い体質の方がいらっしゃいます。そのような場合は一生効果が続きますので、予め御了承ください。」

そう、理子はそのまれに弱い体質の人間だったのだ。 これで、理子は一生ケンに連れ添うことになったのだった。

好意レベル 1

今日も何もめずらしい事も大した事もおきずに夜が更けていくのを尻目に俺は黙って観るでもなくテレビをつけて、携帯電話をいじっていた。
最近ではパソコンよりも携帯電話でネット上の情報を確認することが多い。友達とのやりとりも携帯メールが圧倒的に多い。そんななか突然メールが入ってきた。差出人に覚えは無いがここところよく入る広告メールだろうと思ってはいたが、とりあえず開けてみることにした。
文面に眼をやるといままでの広告メールとはちょっと違っていた。
『メールをご覧頂きありがとうございます。今回は携帯電話のご利用が多い方への耳寄りな情報をお知らせします。』ここまでは普通のどこにでもある文章が並んでいる。だが、次の文面は・・・

『人は文章から情報を眼にします。が、この時にある特定の周波数の電波を出す事でよりその文面に読んでいる人を引き込む事ができる技術を当社は開発いたしました。』『この技術を使った文章の作り方はとても簡単で目的毎にことなる周波数のデーターを長さに応じてダウンロードし、メール送信の際に添付ファイルとして同時に送信することで受取った相手がメールを開くだけでデーターの周波数が自動的に再生されます。』

だいたいこんな内容のメールだった。
俺『ふ～ん、どんな目的のデーターがあるんだろう？』そう呟いてメールのリンクをクリックすると、『言霊研究所』という少々怪しいサイトにつながる。『データー』と書いてあるリンクをさらにクリックしてみると、目的ごとにデーターが並んでいる。『好意』はともかくとして『嫌悪』というものもある。
俺『中には別れたい。とか言うやつもあるしな～ どれどれ・・・ この好意ってのもいろいろとあるんだな。へ～結婚まで、つてのものもあるのか。』
中にはお試しで無料というものもあるらしいので、ちょっと試しに落としてみる事にした。
俺『え～と、好意から『友達レベル』ってのがあるな。嫌悪から・・・『他人レベル』ってのが面白そうだな。』
試しに大学の友達に『他人レベル』を送ってみることにした。あとから『友達レベル』を送れば元の関係には戻るだろう。とりあえず、適当な文章を作って『他人レベル』データーを添付して送信してみる。が、当然のことながら、いまずぐに結果が分かるわけじゃない。明日の朝、顔を合わせたらやつがどんな態度をするか見物だな。

次の日、大学では講義の時間が合わないから友達とは午前中は顔を合わせる事がなかったが、昼飯のときに学食で会うことができた。
俺『よお、今日の講義は午後からだったのか？』
友『別に。めずらしいですね。俺君が話しかけてくるなんて。』
俺『いつも、みかけるからね。』
友『ふ～ん。まあ、いいですが。』

昨日までは比較的に親しい友人として話していたのだが、、まるで初めて話しかけたような反応である。
なんと、昨日までは必ず学食で今夜の予定などを話しながら二人で食べていたのに、初めて声をかけたような反応をしてくる。「こりゃあ、かなり面白く遊べそうだな。」そこで、早速友達に『友達レベル』のデーターを付けて、もう一度メールを送信しておく。中々気の良い友達なのでこのまま他人のような相手をされていたんでは、ちょっと惜しいし、最初から友達としてやり直すのも時間がかかる。
メールを送信して次の講義を受けていると、友達からメールがはいる。
友『今日の講義は何時までだ？面白い店を見つけたんだが行かないか？』とメールが入る。返信は『どこ？』とだけかえすと、大学からそう遠くなくちょっとみただけという事だったので、行ってみることにした。
午後の講義も終わり面白い店と云うところに遊びに行ってみると普通の居酒屋風だが、確かに店内にいるのは女の子ばかりで酒や料理を運んでいるのだが、かなり薄着で体形が丸わかりである。
俺『なんか、、キャバクラから隣に座るとか接客を抜いたところだな。』
友『でも、面白いだろ。ここってオーダー以外に話しかけても返答してくれないんだぜ。その分は観て楽しめってことじゃないか。』
俺『ふ～ん。。。おい、あの子可愛くないか？』
友『どれどれ、、いい感じだよな。お前の好みにぴったりじゃね？』
俺『なんとかしてメアドとか聴けないかな？』
友『無理無理！俺も何回か試したけど。「それはメニューにございません。」って云われて終わりだったよ。』
俺『メアドさえあれば・・・』
友『なにをメアドにこだわってんだよ。なんかあるのか？』
俺『実はな面白いサイト見つけたんだよ。ここじゃ人の眼があるから俺の部屋で話すよ。』
友『じゃいってみるか。』

会計を済ませてジブンの部屋に向かう。部屋についたところで昨日見つけたサイトの事とか実際に友で試したことなんかを詳しく話した。
話を聞き終わると友達は・・・
友『なるほどね。』と実際に携帯電話の画面を観ながら半信半疑って感じで言っている。
俺『面白そうだな。人間関係を携帯にメールするだけで作れるんだぜ。面倒な付き合いとかに時間をかける必要が無いんだ。』
友『ということは、携帯のメアドさえ知ってれば気になる女の子とすぐに恋人同士になれるってことか？』
俺『試してはいないけど。そういうことになるな。』
友『よし、同じサークルの子にメールして試してみるか。』
俺『どのレベルにするんだ。』
友『え～っと、おっ！ここに恋人レベルってあるじゃんか。これやってみよう。』
俺『いきなり恋人って危なくないか？どんな性格かも判らないのに。』
友『性格に問題があったら別れりゃいいじゃねえか。恋人ならまだ結婚までいかないんだし。』
俺『それもそうだな、ちょっと試してみるか。』

俺と友達は二人とも『恋人レベル』のデーターをダウンロードしてお互いに気になる相手が同じ女の子にならないように注意しながら、メールをしてみることにした。

好意レベル2

サイト内をいろいろと観ていくとデーターに関しての注意事項やいろんなことが書いてある。中でも気になるのは「データーを添付して相手に送信した場合でも相手の精神状態により効果が異なる場合があります。」と書いてあった点だ。俺『これってさ、好意データーが逆に働くとかな？だとしたら、全くの逆効果になっちゃうぜ。』友『それはないんじゃないか？ほらここに「逆効果になってしまうことはございません。」ってあるから、効き過ぎとか効果が薄いつてことじゃないか？』俺『どれどれ、そうか。恋愛データーがその先までいったり、軽い付き合い程度で終るってことかな？だったら、試してみる価値があるかもな。』

そんなやり取りをしながら、俺と友は恋愛データーをダウンロードしてみることにした。俺は前々から同じ大学のサークルで気になっていた、愛由美ちゃんに、友は以前に合コンで知り合った1つ上の会社員に送るそうだ。そして、二人はお互いに知恵をしぼってテスト前よりも気合いを入れてメールを作り送信してみることにした。送り終わってしばらく待って見たが、何も変化は起こらない。携帯電話のメールである以上相手がメールを読まない限りは効果がでないのである。ただ、待っているのも暇ではないので俺と友はゲームの話とかをしてその夜は日が変わるまで過ごした。日が変わって10分ほどしてから友は明日の大学の事もあるからと云って自分のアパートに帰って行った。俺はシャワーを浴びて寝る事にした。愛由美ちゃんがメールをいつ読んでくれるだろう？とか考えて眠りについた。

次の日の朝起きて顔を洗っても眠いのがおさまらず、寝ぼけ眼でボーっとしていると携帯電話にメールが着信しているのに気がついた。愛由美ちゃん？と思って開てみると友からだった。「ごめん。今日は大学に行けそうにないので代弁しといてくれ。すまん。訳は後で話す。」だいたいこんな内容だった。俺『もしかして、メールを送信した相手とうまくいってデートか？羨ましいこった。』そうこうしているうちに自分も大学に行く時間が迫っている。手っ取り早く身支度をしてアパートを出ると駅まで5分ほど歩いて駅に着くと、なんと愛由美ちゃんが改札に人待ち顔でいる。確か愛由美ちゃんの最寄駅は違う方向だったはずだ。友達と待ち合わせでもしてるのか？と思い近づくと愛由美ちゃんから声をかけてきた。愛由美ちゃん『俺君、遅かったじゃない。待ってたのよ。遅れちゃうから早く行こ。』俺『えっ？？？待ち合わせしてたっけ？』愛由美ちゃん『なに云ってるのよ。付合いだしてからずっとそうじゃない。忘れちゃったの？あゆ、悲しくなっちゃうじゃない。』俺『ごめん、ごめん。さ、行こっか。（なんか効果ありすぎじゃねえか？）』と疑問を持ちながらも・・・そのまま大学に行って講義を受けることにした。大学に行く途中も、ついでにいるからも愛由美ちゃんは恋人モード全開で俺に接してくる。不思議なのは周囲のはんのうだが、まるで以前から付合っているほぼ公認の状態になっていることだ。昨日まで付合っていなかったのがウソのように周囲から校門で『よ、今日も夫婦で通学か？いいね〜』とか云ってからかわれる始末だ。どう考えても変だ。何かあの言霊研究所のデーターを落とした時に何か重大なことを見落としていたのではないかとそうとしか考えられない。そうこうするうちに1時限目は愛由美ちゃんと同じ講義だったので、終始隣にいるから携帯電話でサイトを確認することもできない。ちょっとでも脇見をしようものなら『ねえ、授業に集中しよ。』とくる。そのせいで代弁もできずじまいだった。『友よ・・・すまん。』と心で謝りながら、事情を説明すれば判ってくれると思っていた。1時限目が過ぎたところで次の授業まで俺はちょっとした時間ができた。愛由美ちゃんは休む間もなく次の授業だったので、昼休みまで学食で過ごして愛由美ちゃんの講義が終ってから一緒に食べる約束をして別れた。学食でコーヒーを飲みながら言霊研究所のサイトをチェックしていると、ちょっと理解できない注意書きがあった。「当サイト内のデーターは日本古来の言霊という言葉の持つ重みを極限まで強めたものとなっておりますので、該当するデーターに影響を受けた方の周囲までその力が及ぶ場合があります。また、突然人間関係が変化すると記憶に混乱を生じますので、遡って影響を及ぼすように作られております。」読み終わってふと考え込んでしまった。『と云う事は愛由美ちゃんにとって俺はかなり以前からの付き合いで恋人同士になっているということか。。その影響が強過ぎて周囲も何の違和感もなく受け入れているとことなんだな。』『そういえば、友はどうしたんだ？電話してみるか。』携帯で電話を入れてみた。

俺『もしもし、友か？どうしたんだ。』友『よ〜、俺じゃないか。代弁なんて頼んで悪かったな。』俺『ごめん。愛由美ちゃんへの効果が効き過ぎて代弁できなかった。すまん。』友『あ、じゃあ、しょうがないな。こっちはこっちで上手くいったぞ。ゆうべ2時頃かな？データーを送った相手から電話が入ってさ、これから会う。って話になってそれから朝までって云うか、ついさっきまで離してもらえなかったんだ。』俺『やけに効果があったもんだな。じゃあ、そうとうお疲れなんじゃないか。』友『へんな想像するなよ。午前中は朝ご飯を作ってくれて食べながら、二人で別のアパートで一緒に住もうかってことを話してたんだよ。俺のほうはどうだったんだ。』俺『アパートでて駅に着いたら彼女が改札で待っててくれて、同伴通学、さっきの授業も隣の席で受けたんだぜ。昼飯は学食と一緒に食べようってことになっている。』友『でも、これってさ、効果はどのくらいもつんだ？まさか1ヶ月とかで期限切れになったりなんかしないだろうな？』俺『さっき、もう一回サイトを観てみたんだが、特に持続する期間とかはなかったな。』友『このまんま続いて欲しいと今は思ってるんだが、新しく引越した先で効果がなくなったら悲惨だからな。』俺『そうだな・・・調べておくか。』友『おれも調べておくよ。じゃ、切るぜ。』俺『じゃあな。』

効果はあった、あり過ぎたと云ってもいいだろう。心配なのはどのくらい効果があるかだ。明日切れるのか1年後なのか或は一生続くのか？ただ、恋人同士とは云え行き違いとかで喧嘩別れすることだって実際にはあるのだ。このデーターで恋人同士になったのと自然に恋人同士になったのの違いが無ければ、行き違いなどがなければそのままの状態でいられるんだろう。とも考えられる。俺『そもそも言霊って何をさすんだ？その意味ってなんだ？』俺は図書館で言霊の意味を調べてみることにしたがちょうど昼休みになってしまった。

愛由美ちゃん『ごめんね〜 待ったでしょ？ はい、お弁当。』俺『えっ？お弁当があるの。』愛由美ちゃん『はい。これ。』開けてみた。しっかりとバランスを考えて作ったんだろう。美味しそうなおかずとご飯が弁当箱に入っていた。食べながら、話を続ける。

愛由美ちゃん『ねえ、俺君。そろそろ一緒に住まない？』

俺『ぶほっ、ごほっ、げほっ。。。。。。』

愛由美ちゃん『どうしたの???今日はちょっと朝から変よ? だった、二人とも来年は卒業だし、俺君だって会社は決まってるじゃない。あたしも昨日内定もらったから、卒業と同時に結婚しても大丈夫じゃない。』

俺『け・・・けっこん???』

愛由美ちゃん『あら?先月プロポーズしたのはどちら様でしたっけ? それとも、あれは結婚詐欺の練習だったのかしら?』

俺『いや、とんでもない。突然OKもらえて気が動転してるだけさ。』頭をブルブルと強く振って何とかごまかすことができたらしい。

「もしかして友のやつも今日の午前中にこんな話をしてたんだろうか?たいへんだな。あっちは彼女が1つ上でもう働いているから余計に話がすすんじゃったんだろうな。」と呑気に考えてみた。

だが、このままだと自分は卒業と同時に結婚となってしまうような雰囲気だ。 愛由美ちゃんが奥さんなら申し分は無いとおもうのだが、自分は愛由美ちゃんの何も知らないまま恋人になっている。愛由美ちゃんは自分のことをかなりのところまで知っていそうなのだ。 実際に弁当箱の中身はバランスを考えながら俺の好きなものが多く入っているし、量的にもちょうどいい具合だ。これならこのまま過ごしていつかあったら、わざとでも行き違いでも作って愛由美ちゃんが嫌いになりそうなことをやって別れればいいだろうと思って、当面はそのままにしておくことにした。

友も同じように考えたらしい。 なんと云っても彼女は友にべったりだし、気のいい娘らしかった。 メールをしてから1週間後、久しぶりに友に会うことになった。お互いの彼女には『男同士の付き合いで飲みに行く。』と話して同行は避けた。お互いに効果の報告をするのに隣にいられたんではたまったものじゃない。

好意レベル3

夜、8時頃になって友と俺は俺のアパートの駅近くにある居酒屋で落ち合うことにした。それと云うのも愛由美ちゃんがなかなか離れてくれなくて、まあ、アパートと一緒に帰ってから一緒にお風呂とか入ったわけだが。。憧れの愛由美ちゃんとたった1通のメールでこれだけ仲良くなれたんだから、バンザイ！なわけだが、なんとなくうまくいすぎて、拍子抜けした感じだった。

俺『よお、こっちこっち。』
友『遅くなってごめん。彼女が離してくれないだけじゃなくて一緒に会う友達に挨拶したいって言い出してさ、1人でくるのに苦労したぜ。』
びろ～んびろ～ん。
友『ごめん、彼女から電話だ。ちょっと出てくれないか？』
俺『なんでおれが？おまえに用があるんじゃないのか？』
友『居酒屋に着いたら一緒にいるのは友人の俺くんだけだから電話してみな、って云っちゃったんだよ。』
俺『なんか、ずいぶん尻にしかれてないか？まあ、いいさ、ちょっと電話貸してくれ。』
俺は友から受取った携帯電話にでて友の彼女と一緒にいるのは自分だけで、他にはいないこと。長い付き合いでいい友人である事なんかを話した。彼女さんも納得したようで友と変わってくれと云うので、携帯電話を返すと二言、三言言葉を交わして友は電話を切った。
俺『どうだった。納得したろ。』
友『納得してくれたよ。ありがとう。あとはあんまり飲み過ぎるなってさ。』
俺『愛由美ちゃんもしばりかたがすごいんだぜ～朝から晩までべったりでさ、1人になる時間なんてありゃしない。そして、たぶん、おまえと同じようにこっちも引越しになりそうだ。知らないうちにプロポーズしてたらしいしな。』
友『おまえもそうなのか？自分も同じだぜ。今日は2～3件アパート見て回ってさ、けっこういいところがあったんだよな。』
俺『ただ、気になるのはさ、こっちは愛由美ちゃんの事をほとんど知らないのに愛由美ちゃんは「長い付き合い」とか云って俺の事をずいぶんと知ってるんだよな。なんか話から推測するとお互いの両親への顔見せも済んでるらしい。』
友『こっちは既に婚約済みって話だぜ。それも、お互いの両親も納得済みなんだと。』
俺『じゃあ、もう結婚するしかないじゃねえか。』
友『そうなんだよ～彼女の性格もろくに判らないうちに結婚だぜ。少し彼女が嫌がる事でもすれば別れられると思ったんだが、彼女のことかわからないからそれもできない。俺君はどうなんだ？このまま愛由美ちゃんと結婚するのか？』
俺『もう少し遊びたいと思ったんだが、、もう一回メールして友達関係程度にしようかと思ってる。』
友『自分もそう考えてたんだ。いきなり結婚までいくとは思わなかったからな。あのデーターでもっと遊べるかと思ったんだがあてが外れた。』
俺『じゃあ、またそのサイトに入ってみるか。』
友と俺はお互いに自分の携帯電話で例の言霊研究所にアクセスしてみようとするが、エラーしかでてこない。
確かにブックマークしておいたはずだが、アクセスできない。怪訝に思って最初に届いたメールを受信箱から探そうとしてみたが肝心のメールも消えている。

俺『おい、サイトが無くなってるぜ。』
友『サイトが無いってことは変更が出来ないってことだぜ。』 二人は居酒屋で酒を飲みながら考え込んだ。
どんな性格かもわからない女性にべた惚れされて結婚するのは、その先になにがあるのか・・・

言霊研究所の一室では・・・
2人の男が話をしていた。
研究者『まったく・・・研究途中のデーターを販売してしまうとは・・・』
営業『そんな事を云われても困ります。あなたの助手が「これなら大丈夫ですよ。」って持ってきたんですから。』
研究者『だが、あれは確かに効果はあるが制御が効かない欠陥品だぞ。』
営業『あなたの助手はそんな事は云ってなかったのですね。こっちは完璧に完成品だと思って販売したんだ。でも、制御が効かない、ってどういう意味だ？』
研究者『制御が効かないってのはだ、例えば恋愛データーでも嫌悪データーでも一旦そのデーターを聴いた人間は他のデーターが作用しなくなるってことだ。それも進行しながらだから始末が悪い。』
営業『って事は一旦恋愛データーを聴いたら、どんどん相手に惚れ込んでいくってことか？けっこうなことじゃないか。』
研究者『片思いの人間がその相手に使った場合、本人は軽いつもりで使っても結婚までいってしまうんだぞ。それはまだいいほうだ。嫌悪データーなんか使ってみろ、国同士だったら戦争になりかねん。』
営業『そこまで嫌ってしまうのか。それはそれで怖いな。』
研究者『で、実際にデーターは何回ダウンロードされたんだ？』
営業『予算が無くて告知がうまくいかなかったから、お試しの他人と友達が各1回と恋愛データーが同一の携帯電話で各1回、それと違う携帯電話で恋愛が1回だけだ。それ以外はダウンロードされる前にサイトを抹消したからダウンロードされてないよ。』
研究者『恋愛データーって事は片思いの相手が試して彼女が彼氏にしてみたい、って使われ方ならそんなに問題はなさそうだな。結婚までいくとは知らず。』
営業『相手の事を何も知らないうちに結婚まで突き進んじゃうのか・・・自分だったら使いたくはないな。』

これが恋愛？ 1

これって恋愛か？

アパートの一室でいつものとおり、携帯電話でメールをしていた。相手は出会い系サイトで知り合った娘だ。いままでも何人かと会った事はあるが、どの娘とも話しだけで終わっている。

俺『けっこう大変だな～ まあ、どっかの広告みたいにそうそううまくはいかんよな。』

そんな事を考えてメールの送信を終わらせて、寝るかな～と思った時にメールの着信を知らせる音が。

俺『誰だ？ こんな夜中に？』

メールを開いてみると、よくある広告メールである。消そうかとも思ったが、暇な事もあって読んでみることにした。

「メールをご覧いただきありがとうございます。今回ご案内させて頂くのは、当社が開発した携帯電話を通して頂く事で、意中の人に好意を持たせるシステムでございます。やり方は簡単です。メールを送信する時に当社のサーバーを経由して頂くだけ。メールの文面をシステムが解析して目的に合った特殊データを添付いたしますので、お客様は普通にメールを送信するだけ。料金はサーバー登録料として月300円、メール1通につきシステム使用料の10円がかかるだけ・・・」残りの部分は適当に読みとばした。

俺『ふ～ん、ずいぶん安いな。新しいメアドももらえそうだし、登録してみるか。』

その夜はサーバー登録までしておいた。次の日朝起きてみるとメールが入っていた。

「ご登録いただきありがとうございます。サーバー側の設定が完了しましたので、すぐにお使い頂けます。今後とも弊社をよろしく願います。」

俺『んじゃ、早速試してみるとするか。』

試す相手を誰にしようか考えたが、バイト仲間のレイちゃんにする事にした。そこそ可愛いし愛想もいい。文面はいろいろと考えたが、遠回しに好きって内容にしておいた。

メールを送信してほどなくレイちゃんからの返信がきた。恐る恐るメールを開けてみると、「実はアタシも前から俺君のことが気になっていた。」という内容だった。

俺『へ～、、効果的面じゃん。これは良いサーバーをみつけたもんだ。』

早速レイちゃんへの返信を入れる。バイトの他の仲間には秘密にしておきたいとか二人だけの事にしようとかそんな内容にしておいた。

そんな事をしているうちに大学に行く時間になった。通学途中歩きながら、電車の中では次はどんな相手にメールしようか？そんな事ばかり考えていた。当然のように講義中もそんな事ばかり考えていた。講義で一緒になる女子大生にも可愛い娘は多くいるのだが、メール送信一件につき10円のシステム使用料がかかることを考えると行き当たりばったりと云うわけにも数撃ちゃ当たるって事もできない。まあ、100通で1,000円だからそんなに大した事はないのだが。講義も終わり学食で昼飯を突っついてっていると悪友がやってきた。

友『おい、俺、今日はどうしたんだ。なんか、心ここにあらずって感じだな。』

俺『えっ？ いやそんなことはないぜ。』

友『隠すな隠すな。講義中も他の女の子ばかり見てたじゃねえか。まるで、品定めするみたいな目つきで。』

俺『一丁前に彼女が本気で欲しくなったんでな。』適当にごまかしておいた。例え一番の友とはいえこのシステムの事は話したくはない。友に何ぞ教えたなら大学中の女の子に手を出しかねない。

友『まあ、いいさ。ところで今夜はどうする？ 近所の女子大生と飲みに行く事になったんだが、メンツが足りないんだよ。』

俺『今夜？ バイトが入ってるんで助けにはなれない。ごめん。』

友『そっか～しょうがないな。他をあたるか。』

俺『悪いけどそうしてくれ。あんまりバイト抜けてると首になっちゃう。』

友『気にするな。また、なんかあったら誘うよ。おれは、これから早番のバイトなんで、じゃあな。』

悪友はそういうと学食をあとにしてバイトに向かった。

俺『やべ～～、あいつは変なところに感がいいからな。気をつけなきゃ。』

俺は午後講義が続いてしまったので、大学からバイト先に向かう事にした。ただ、最後の講義がちょっと延びた事でバイト先に着いたのは時間ギリギリだった。店長からはもう少し早くと云われたが授業で、と云ったらあっさり「学生は勉強が本分。」とかいって許してもらえた。

朝メールのやり取りをしたレイちゃんは既に入っていた。

俺『おはよう。早いね。』

レイちゃん『おはようございます。あんまり遅刻ばかりしていると、首になっちゃいますよ。』と普段通りの挨拶を返してきた。だが、なんか変だ。今朝のメールで周囲にばれないようにと云ったのはジブンだが、本当に普段通りの挨拶を返してくる。まるで今朝のメールがなかったかのようだ。いくらみんなには内緒にでもこれはいんじゃないかと思い二人になったときにそれとなく話をしてみる。

俺『レイちゃん、今朝のメールのことなんだけど。。。』

レイちゃん『メール？ 何かアタシにメールしたの？ 俺君。』

俺『えっ？？？ ほらこのとおり・・・』と携帯電話を開いてメールをみせようとしてみたが、レイちゃんからのメールだけが抜けている。どこかにいったのか？と探してみてもみあたらない。

俺『あれ～ へんだな～ 確かにこのフォルダに入れといたのに～』

レイちゃん『ね、他には何もないんでしょ？ 次があるからアタシ行くわよ。』

俺『あっ、、ああ。』気の抜けた返事しかできずにその場に立ち尽くしてしまうところだった。店長に呼ばれなければ。

バイトが終ってアパートへの帰り道の道すがらいろいろと考えてみた。確かに今朝はレイちゃんとメールしているそれは確かだ。だが、メールは残っていない。これは一体全体どういう事なんだろう？

俺『おかしいな～ もう一回メールしてみようかな？』

俺は今朝とは違ってアタックメールを送ってみる事にした。これなら記憶にも残るんじゃないだろうか。

付合ってくれとまで書いてから送信してみる。こんどもほどなくしてレイちゃんからの返信がきた。同じように俺君が好きだったとか、お付き合いできて嬉しいとか書いてある。じゃあ、と考えてデートに誘ってみる事にした。これで待ち合わせ場所にすればいくらなんでも付合ってもくれるだろう。

そう思って「今度の日曜日にデートしない？」とメールを送ってみるとほどなくして、今度はサーバーからエラーが返ってきた。

俺『あれ？なんで送信できないんだろう？何か設定でもミスったのかな？』
何度も何度も試しても送信ができない。しょうがないのでサーバーの管理会社のサポートにメールしてみたが、サーバーには異常がないらしい。しょうがないのでそのままにしてその日は一日のやり取りとか大学の出来事とかの内容でメールしてみることにした。今回はちゃんと送信できたようだ。

これが恋愛？2

ほどなくしてレイちゃんから返信のメールがきた。内容は同じように今日の出来事だとか、大学（別の大学にいったる）で嫌な事があったとか、でもバイトで会えたから嬉しかった。と云った内容が書いてある。
俺『おっかし〜な〜。この内容からだとか今日のバイト先でのあの態度はなんなんだろう？』
どう考えても納得がいけない、判らない。メールでやり取りしてる文面を窺てる限りでは、レイちゃんと俺は恋人同士だ。だが、実際に会うとそんな事は微塵も感じられない。
その日は何通かメールのやり取りをしてから寝ることにした。

次の日の朝、早速レイちゃんからおはようメールが入っていた。今日の午前中は講義がないので大学には午後からいく事にして部屋で溜まっていた掃除とか洗濯をすることにした。その間にもレイちゃんとのメールのやり取りはしていた。
そして2通目のメールを送信してから前に受信したメールを読み返してみようと受信箱を開いてみたが、昨日レイちゃんから受信したメールはどこにも無かった。間違って消すなんて事はない。昨日の夜は最後にメールを読んでから、待ち受け画面にはしたが、削除した記憶は無い。
だが、受信ボックスのどこを窺てもレイちゃんからのメールは残っていない。何となく嫌な予感がしたので送信ボックスの中も窺てみると、俺がレイちゃんに送信したメールが同じように消えている。それ以外の元々のサーバーを使ったメールは残っている。昨日から使っているサーバーを経由したメールだけが全て消えている。

俺『なんで？？？ レイちゃん宛のメールとレイちゃんからきたメールが全部消えてる。』

考えても判らないのと、そろそろ出かせないと午後の講義に間に合わなくなるのでその日はそのまま大学に行くことにした。
通学途中で電車の中でも考えてみたがどうしても判らない。講義の最中にも講義上の空で考えていた。
珍しく真面目な顔をしていたせいか教授からあてられると云うおまけがついて参った。全然講義のことを考えていなかったことで後で教授の部屋にくるように云われてしまった。

教授『今日はどうしたんだ。真面目な顔で講義を受けていると思ったらまったく違う事を考えて集中してないとは。前回のテストでもギリギリだったんだぞ。進級できなくなってしまうぞ。』
俺『はあ、どうもすみません。これから気をつけます。』
教授『何か生活で困った事でもあるのか？ お金以外のことなら相談にのらない事もないぞ。』

この教授は学生達の間でも評判がいいちょっと体育会系の先輩って感じの教授なので昨日からの出来事を話してみることにした。とくに恋愛関係だったら相談にのってくれそうだ。

俺『実はちょっと悩んでいることがありまして・・・』
教授『なんだ？恋のことでも悩んでいるのか？まさかできたとかいうんじゃないだろうな？』
俺『いえいえ、、安心してください。まだ、そのだいぶ前の段階です。』
教授『なら云ってみろ。片思いなのか？』
俺『いえ、実は先日変な広告メールを窺てそこに登録したんですが、そのサーバーをとおすと特殊効果があって文面にそったデータがメールに自動的に添付されるっていうんです。』
教授『ほう、携帯電話のメールもすいぶんと進化したものだな。で、女の子にメールでもしてみたのか？』
俺『そうなんです。バイト仲間の女の子にメールしたら効果があったんでウキウキだったんですが、実際に会うと全然そんな感じがなくなっているんです。』
教授『というത്？』
俺『メールではお互いに恋人同士の感じでメールのやり取りをしてるんですが、実際に会うとそんな感じが全然無くて。それに今朝気がついたんですが、そのサーバーを通したメールが全部消えているんです。』
教授『メールが消えている？それも変だが、メールのやり取りと実際が違うってのも変だな。』
俺『そうなんですよ。で・・・それがなんでか判らなくて。』
教授『それについて考えてたってわけか。』
俺『はい、どうもすみません。』
教授『理由は判った。で、そのメールってのを魅せてもらっていいかな？例の広告メールってやつを。』
俺『広告メールなら。まあ、やり取りしたメールはもう残ってないでしょうし、いいですよ。』

俺は携帯電話を開いて広告メールをみせた。教授は「うん、うん、」「ふ〜ん、なるほど。」と云いながらメールの文面を読んでいる。広告メールはかなり長かったので最後まで読むのはちょっと時間がかかったが、最後のほうまで読んだときにふいに教授が顔をあげた。

教授『俺君はこの文面は読まなかったのか？』
俺『えっ？最後の方は適当に読飛ばしたんですけど。』
教授『ここを読めば納得するだろう。』

教授は開いたままの携帯電話を俺に返してメールを読むように促した。そこにあった文章は。。。
「ただし、このサーバーをとおして送ったメールに添付されるデータは容量の関係でメールを読んでいる時にしか効果を発揮しません。さらにこのサーバーをとおしたメールはある程度の時間が経過すると自動的に削除致しますので、あらかじめご了承ください。」

俺『て、ことはメール内だけの関係？』
教授『よくはわからんが、そういうことらしいな。これで、問題解決、講義に集中できるな。』
俺『はい・・・』
教授『なんだ、問題が解決したのに元気が無いな。現実の恋愛は厳しいんだよ。メールなんかに頼るな。』
俺『わかりました。もういいですか？』
教授『そうだな。じゃ、また何かあったら相談にきていいぞ。』

俺は軽く挨拶をして教授の部屋をあとにした。なんてこった、携帯電話でメールを読んでいるときにだけ効果を発揮するさらに持続時間がほとんどないって・・・ なんか、、バイト行く気しなくなっちゃったぜ。

特殊能力を持つ携帯電話？ 1

携帯電話はどこへ繋がった？

普段と同じアパートへ帰る道を歩いていた。文字通り「普段」とまったく同じ毎日の繰り返しだった。朝起きて顔を洗い簡単な朝食を済ませて駅に行き電車に乗る。電車内で同じ方向から通っている友人と会い電車内で話をしていると、大学の最寄り駅に着く。大学ではとにかく卒業できるように講義に出席して、眠い眼をこすりながら昼まで講義を受ける。昼飯は学食で済ませて、そのままバイト先に走り込み数時間のバイトを済ませてアパートに帰る。俺『あ～あ、つまんねえな～　なんかこう変わった事でも無いと毎日が退屈で死にそうだぜ～』そんな事を考えながら歩いているとつま先になにかが当たった。観ると最新の携帯電話である。俺『なんで、こんなところに落ちてるんだ？』俺はその携帯電話を拾い上げてみる。売り出されたばかりと云う事もあって新品同様である。落ちたときについたと思われる小擦り傷があった。俺『こんなの落としたら持ち主はさぞ困ってるんだろうな。この先の交番にでも届けるか。』歩いて5分ほどのところに交番があるのは知っている。

俺『こんにちは～　誰かいませんか～』警『なんですか～』交番の奥から若い警察官がでてきた。俺『あの～これから5分くらいのところでこんなのを拾っちゃったんですけど～』そう云ってさっき拾った携帯電話を差し出す。警『おや、最新の携帯電話じゃないですか。でも、落としたって人はいませんね。別に届け出もないし。』俺『こんな最新機種で落とし主がいらないわけですよ～携帯電話会社にでも連絡してみれば判るんじゃないですか？』警『そうですね。ちょっとまってください。』警官はそういうと電話を掛け始めた。　ほどなくして、警『え～っとね、落とし主は〇〇市〇〇町の〇〇ー〇アパートに住む、〇〇さんらしいですね。』俺『ええっっっ？？？？』　俺はすっとなきょうな声を上げた。警『どうしたんですか。』俺『すいません、それって俺です。』警『はあ？アナタはジブンが買った携帯電話も覚えてないって事ですか？』俺『いや、、買った記憶が無いんです。あ、これ俺の免許証です。』

警察官にはちょっと小言を言われたがとりあえずその携帯電話を受取ってアパートに帰ることにした。

俺『へんだな～　ジブンが元々持ってた携帯電話は・・・』とバッグを探したが無い。どこを探しても以前に買った携帯電話がないのだ。　そうなると本当にこの携帯電話はジブンが買ったのかもしれない。そう思って携帯電話を開いてみると見慣れた待ち受け画面がでてきた。メールも通話履歴とかもジブンの覚えているとおりだ。俺はそれ以上あまり深くは考えずにその携帯電話を使う事にした。　考えても判らないことで時間を取られてもつまらない。そう考えてシャワーを浴びようとする、携帯電話に着信が入った。　聞き慣れた着信音だ。ただ、開いてみるとまったく知らない番号からである。　とりあえずは出る事にした。

俺『もしもし、どなたでしょう。』携帯『もしもし、俺君よね？初めて電話します。理子といいます。』俺『その理子さんはどうしてこの番号を知っているんですか？』理子『そんなことはどうでも良いじゃない。ねっ、それよりこれから会えないかしら。』俺は戸惑った。声の感じから若い女性であることは間違い無さそうだ。　ただ、どうやってこの番号を知ったのかが気になった。俺『いいですよ。どこに行けばいいですか？』理子『駅前のファミレスでどうかしら？』俺『わかりました。すぐに行きます。』

その後どんな服装でどの辺の席にいるのかなどを確認して電話を切った。　会う事にしたのは会ってみなければこの番号を知った理由も判らないとおもったからだ。

5分後に指定されたファミレスについて店内を見回すと云われた場所に「理子」となる女性がいた。俺『どうも。』理子『俺君ね、はじめまして。』俺『率直に聴きます。なんで、俺の携帯番号を知っているんですか。また、あなたは誰ですか？』理子『そ～ね。どこから話をしようかしら？まず、俺君が今日拾った携帯電話なんだけど、それ普通の携帯電話じゃあないの。』俺『それは、判ります。拾っただけジブンの物になるなんて初めてですし。こうやって知らない人から電話がかかってくるのも初めてです。』理子『え～とね、その携帯電話はね、ある霊能者がジブンの能力を封じ込めたもののなの。で、普通とは違う能力っていうのは、手にしている人の情報を元にしジブンの持ち主を選ぶ電話なの。俺君は気に入られたようね。』俺『え、、携帯電話が持ち主を選ぶ？気に入らない人だとどうなるんですか？』理子『その人のところを離れるだけよ。そして次の持ち主を捜す。』俺『と、云う事は俺が拾う前に持ち主のカバンから脱走したって事？』理子『脱走とも云うわね。で、その霊能者ってアタシの親類なの。本人はもう霊能力を使った仕事をするのが嫌になってそんな事をしたらしいのね。いまは行方不明だわ。ただ、祈祷で呼び出す事はできて、いまの持ち主の電話番号は教えてくれるのよ。』俺『それで、俺の電話番号を携帯電話に聞き出して電話をくれた？ってこと？目的は何？電話なら返さないよ。』理子『別に返して欲しいわけじゃないわ。ただ、使い方を誤ると持ち主に危険が及ぶから忠告にきただけ。』俺『危険？なんの？どこから危険な霊でもくるってのかい？』理子『簡単にいえばそういうこと。元が優秀な霊能力者だから霊力も大したものなの。もっとも普通に携帯電話を使ってるぶんには何も起きないわ。ただ、持ち主の感情があまり強いと電話した相手に力を及ぼす危険があるの。』俺『それなら俺には何も起きないんじゃ？』理子『相手に向かった霊力は当然反動で持ち主にも及ぶわ。そんな力を受けるのは嫌じゃない？』俺『そうだな。忠告ありがとう。気をつけるよ。』

そういうと俺はレシートを持って席を立った。理子は自分の分は自分で払うと云ったが、コーヒーの一杯もおごれないと思われてもつまらない。よくみるといい女だし。ただ、それ以上の事は無かった。ファミレスの出口で軽く礼を言うとそのまま別れた。理子は駅のほうに歩いて行く。おれはひとまずアパートに帰る事にした。俺『ふ～ん、この携帯電話にそんな力があるんだ。でも、普通に使う分にはそんな現象はでないらしいし、でもどんな感情でも相手に影響をだすのかな？ 例えば、この携帯電話で女の子と話すと相手が自分を好きになってくれたりとかするのかな？ 』って試す相手もいやしないし。』携帯電話を眺めてそんな事を考えていたら着信が入った。携帯電話の画面を覗いても知らない番号だ。 でてみることにした。

俺『もしもし、どなたですか？』携帯『あの～突然この番号に電話しなきゃって思っちゃって電話したんですけど。アタシは美子っています。』俺『ども、俺っています。で、何か話しましょうか？』美子『そうね～ できれば直接会ってお話がしたいんですけど、俺さんはどちらにお住まいなんですか？』俺は最寄りの駅名を伝えた。電話の相手の美子も同じ駅らしい。時間はまだ夜の9時、これから会ってもそんなに遅くはならないだろう。 そう考えてさっき出たばかりではあるが、駅前のファミレスで会うことにした。どうも美子って娘は駅の反対側に住んでいるらしかった。

駅前のファミレスで美子って娘と話をしてみる。 俺がアパートに戻って携帯電話bに向かって考え込んでいた時間に、美子ちゃんの携帯電話が一瞬震えたらしい。 なにかと思って携帯電話を開いたところ、俺の携帯番号が頭に浮かんできてどうしても電話しなきゃいけないって思ったらしい。俺は「もしかすると俺の携帯電話が身近なところで俺と話が合いそうな娘を探して霊力でかけさせたのか？」と思っていた。 それはそれでありがたいことである。自分からは何のアプローチもせずにも女の子とお友達になれるのである。もしかするともおいしい思いもできるかもしれない、 などと考えていると美子ちゃんから思いがけない言葉がでてきた。美子『え、俺さんの部屋がみたいんだけど。』俺『え？？？ なんで？』美子『なんとなく、ここじゃなくて俺さんの部屋に行きたいって思っ。。。。』その後は頷いたまましゃべろうとしない。 お互いに黙ってても仕方がないので部屋に連れて行くことにした。

俺『さ、どうぞ。ちょっと散らかってるけどね。』普段から本とかDVDは見終わったら押入れにしまっているの、散らかっているのはごく普通の週刊誌などで覗かれても、気まずくなるようなものはない。美子『へ～ 男の人の部屋にしてはコザッパリしてるのね。Hなほんとかが散乱してるのかと思ったけど。』俺『そういうのを片付けておかないとね。それに散らかってるには嫌いなんだ。』美子『ふ～ん、、、』というとき美子ちゃんは俺を見つめてくる。そのまま俺の目の前にくるといきなり手をまわしてきた。 これって誘ってるのか？戸惑いながらも俺も美子ちゃんの腰に手を回す。

特殊能力を持つ携帯電話？ 2

そのままキスしようかと思ったが、美子ちゃんはジブンの胸に顔をつけてじっとしているだけである。

美子『ごめんなさいね。こうしているだけでホッとするからこのままでいい。』

俺『俺も人の暖かさを感じるのは久しぶりだ。このままで我慢する。』と云いながらも下半身はだんだんと期待で元気になる。

美子ちゃんはそれを察したのか、身体を離れた。

美子『これ以上は無理だからね。期待させちゃってごめんなさい。』小さな声で謝ってくる。

俺『謝る事なんて無いよ。これは自然な反応だし。』

美子『これ以上いると襲われちゃうかもしれないから、帰るね。』

そう云うと俺が返事をするまえに玄関に向かってそのまま俺の部屋をでていった。 アパートの階段を下りる音がする。

俺は呆然として立っていたが、座り込んだ。

俺『確かにあのままだと襲っちゃったかもしれないなあ。』などと呟いた。

美子ちゃんはスレンダーに見えたが抱き合っているときに大きめの胸の感触が伝わってきて、下半身が自然と反応してしまったのである。ただ、知り合ったばかりの女の子、それも向こうから会いたいと云ってきたのである。

ここまでは携帯電話の特殊能力のせいなんだろうか？どこからどこまでが携帯電話の能力なのかが判らない。

抱き合うところまではできるがその先にいくには俺が努力しなきゃだめなのか？など考えても判らないことだらけだ。

まあ、こうやって女の子の友達が増える事自体は悪い事ではない。もっと気楽に考えてみることにした。

15分ほどしてから美子ちゃんから電話が入った。

美子『もしもし、俺君？こんどの日曜日に時間ある？どっか行かない？』

俺『日曜日？日中ならいいよ。夜はバイトが入ってるけど。夜8時くらいからなんだ。』

美子『じゃあさ、隣町でも行こうか。あそこならほとんど知ってる人いないから。』

俺『そうしよう。』と云って電話を切った。 この町だと知り合いがいるからダメらしいのだが、まあ付合っているって訳じゃないから、変な噂でのたつとやばいのかな？くらいにしか考えなかった。

それから何回かデートみたいな事をしたが、どうしてもそれ以上の関係になることはなかった。 なぜだろう？会っている時と電話で話している時はいい感じで好意をもっているようにみえるが、一線を越えようとするすると突然冷めた眼になる。

一度は強引にしてみようかとも考えたが、そう考えた瞬間に距離をおくようになる。

どうしてもその先にいけないのである。

俺はだんだんと欲求不満気味になってしまう。 デートまがいのことでずっとお預けをくっている感覚だ。

もうそろそろ限界と思った頃に突然美子ちゃんから別れの電話があった。

美子『ごめんなさい。もう会う事ができないわ。お別れにしましょう。』

俺『え？なんでまた突然。』

美子『どうしてもダメなの。じゃあ、たのしかったqは、さようなら。』

突然の別れを告げられる。一体どういうことなんだろう？俺は唯一の原因をしっていそうな、理子とかいう女に電話をしてみた。

理子『もしもし、あっ、俺さんね。どうしたの？』

俺は訳を話して思い当たる事が無いか聴いてみた。理子の口からは思いも寄らない答えが返ってきた。

理子『前に能力を閉じ込めたって人がいたことは話したわよね。その能力ってね・・・』

そう云って話してくれた内容を聴いて全てを理解した。

その能力とは「人に好意を持たせる事ができるが、潔癖性のためその先にいけない。」というものだった。特にセックスに対しては嫌っていたようだ。そしてその能力は1人で彼女もいない俺の為に近所で良さそうな女の子をピックアップして能力を使って電話をかけさせた。だが、事がおきそうになるとその霊力を弱めて避けるようにしているらしい。

その先にいくには俺自身の魅力を上昇させなければいけない、という事らしい。

俺『だ—————！それができりゃ苦労しねえよ—————！！！！』

まあ、友達はいっぱいできるらしいのだが。。。

どこからの電話？1

ぴろ～ん、ぴろ～ん。携帯に着信があったので俺は普段通りにでてみた。

もう夜10時近くだが、友人はゲームなどで夜更かししているの事が多いのでおそらく友人の1人だと思ってみたが、携帯を開けてみるとみたことの無い電話番号だった。不審には思ったがでてみることにした。

俺『もしもし、どなたですか？』

携帯『どなたじゃないわよ。いつになったら帰ってくるの？』電話してきたのは女性からだったが、声になんとなく聞き覚えがあった。

俺『えっ？いまはアパートの部屋にいるんだけど？』

携帯『なに云ってるの？あなたの家はいまはマンションなのよ。連絡も無く遅くなるなんて無かったのに、どうしたの？』

俺『そう云われても困るんだけど・・・もうこのアパートに住んで3年になるし、俺は独り住まいなんだけど。』

携帯『変ね？もしかしたら掛け間違いかもしれないわ。ごめんなさ。』

ここのところこんな訳の判らない電話がよくかかってくる。声の主は決まって俺の事を知っているようで、俺もなんとなく聞き覚えのある声の持ち主が多い。だが、それが誰だかはわからない。話の内容はまったくわからず、2、3言言葉を交わすと相手が『間違い電話かも。』と云ってきってしまう。一度かかってきた電話にかけてみたこともあったが、通じない。そんな事が続いたある日俺は普段通りに仕事で会社に行ったのだが、普段は手伝ってくれるはずの同僚が風邪で休んでしまっていた。その日は大事な客にプレゼンするための資料を最終的にまとめる予定だったのだが、とても1人でまとめきれものではない。上司にかけあったが、とても代わりのスタッフを付ける余裕はないとのことで、結局1人でまとめることにした。予想通り資料をまとめるに終わったのは夜12時を少しまわったところだった。これで、明日上司に確認をとって明後日のプレゼンには間に合うだろう。

だが、12時を過ぎてしまっていたので自炊する元気までは残っていないので、近所の居酒屋にのみに行く事にした。深酒をしなければ問題は無い。そこは評判の居酒屋で席はカウンターしか残っていなかったのも、そこでつまみを多めに取ってビールを注文した。ビールの2杯目を飲もうとしたときに携帯の着信音がする。

開いてみるとメールが入っていた。1通は休んだ同僚からで休んだ事への謝罪文が書いてあった。過ぎた事なので気にしていない、と返した。もう1通はまったく知らない相手で、いま銀座のいつもの店で飲んでいるからこないか？という内容だった。俺の給料では銀座なんかに行けるわけは無い。たぶん、メアドの打ち間違いだろうと思ってほっとしておくことにした。

俺『こんどは間違いメールか・・・どうしちゃったんだろう。』1人誰に云うとでもなく呟いた。

それが聴こえたのか隣の客が話しかけてきた。

隣『どうされました？』

俺『えっ？聴こえちゃいましたか。すみません。ウルサくて。』

隣『いえいえ、いいですよ。私も一人で飲んでてつまらないと思ってたところにちょっと聴こえたもので。宜しかったらお話をさせてもらってもいいですか？』

俺『そうですね。俺も一人で飲んでてもつまらないし、どうせ判らない事なんでちょっと聴いてもらってもいいですか』

隣『いいですよ。どうしたんですか？』

俺『実はここんところよくあると云っても1日に1回あるかないかなんですが、間違い電話とか間違いメールが多いんですよ。ただの間違い電話ならなんて事は無いんですが、掛けてきた相手もメールを送信した人も俺を知っているような感じで気軽に声をかけてくるし、そんな内容のメールなんです。さっきのメールもこのとおり。』と云って先ほどの間違いメールを隣の人にみせる。俺『メールの内容から考えると相手は俺とよくその店にいくようなんですが、俺はしがいないサラリーマンで銀座に行きつけの店なんて無いし、これたぶん返信してもエラーで戻ってくると思うんです。と、云うのも間違い電話の相手にかけたことがあるんですが、番号違いでかからないんですよ。』

隣『それはまた変と云うか気味が悪いですね。確かに文面からはあなたとよく同じ店に行っていると云う感じですね。でも、それに返信しても相手には届かない。っていうのが一番気味が悪いですね。』

俺『そうなんです。間違い電話のくせに相手にはかからない。間違いメールなのに相手に届かない。そこが気になって気になって。まあ、最近は考えるないようにしていますが。わからないんで』

隣『判らない事はあんまり深く考えないで忘れた方がいいかもしれませんね。それより、何か別の話でもしましょうか。』

そういうと隣のひとと俺は世間話をすることにした。居酒屋で飲みながらまったく見知らぬ人と話するのは初めてだったが、これが世間でいうところの「飲み友達」というのだろうか、と思いながら結局午前1時近くまで話し込んでしまった。

お互いに明日も仕事ってことでお互いのプライベートは詮索せずに、また会うことがあったら話しましょう。ということでその日は別れた。俺は自炊が多いので居酒屋にはあまりこないという事も云ったが相手は何かの縁であうことがあれば、と云っておいた。

仕事でも趣味でもなく人と話をしたのは初めてだったが、ちょっと話したことであまり気にせずに済ませる事ができるようになりそうだった。

どこからの電話？ 2

ひとしきり話してから居酒屋で別れた俺はアパートに帰った。

次の日風邪をひいた同僚はまだ具合が悪そうだったが、出社してきた。

同僚『悪かったな。全部作らせちゃって。こんどお詫びになんか驕らせてくれ。』

俺『気にするな。チームを組んでいる以上お互い様だろう。今度俺がダウンしたらよろしくな。』

俺は茶目っ気たっぷりにそう返した。

仕事が始まって昨日作った資料を上司に確認してもらう。 予想以上のできだと評価してくれた。

一部分に修正はあったが明日のプレゼンに問題はないとのことだった。 また、これならライバルを蹴落としてうちの社に仕事を取れそうとのことだった。

資料の修正が終わったのは就業時間の直前だった。

同僚『よお、今夜は特に予定ないんだろう、付合え。』と誘ってきた。

俺『今夜は、じゃなくて、今夜も。だぜ。』とやり返す。

同僚『まあ、そういうな。』

そのとき、また携帯に着信が入った。 ぴろ～ん、ぴろ～ん。

同僚『おっ！？彼女からのお誘いか？』

俺『彼女なんかいいね～よ。』そう云って電話を開くがまたしても知らない番号だった。

黙って携帯を閉じる。

同僚『おい、でなくていいのか。』

俺『いいんだ。それより行こうぜ。』

俺は同僚を促すと会社をでて近所の居酒屋に一緒に入る。ここは社の近くなので他の社員に会うこともあるが、そういう時でもお互いに声をかけない暗黙のルールがあった。俺はさっきの電話の件について同僚にも話してみることにした。

俺『実はさっきの電話の件なんだがな。』

同僚『どうした？彼女ともめてるのか？それとも別の困ったことでもあるのか？』同僚は身を持ち出してきた。

俺『そうじゃないんだ。実はここんところ知らない番号からしょっちゅう電話がかかってくる。それも全部違う番号なんだ。最近知らないアドレスからのメールもくるようになった。それだけなら、ただの間違い電話で済ませればいいんだが。』 ここでビールを飲む。同僚は真顔で聴いてくれている。

俺『電話の相手もメールの相手も俺のことをずいぶんと馴れ馴れしく呼ぶ。よく知っている間柄みたいに接してくるんだ。』

同僚『で、おまえは相手の声に聞き覚えが無いってことか。』

俺『そうなんだ。それで、少し戸惑っていたんだ、最初の電話が入ったのがかれこれ1ヶ月くらい前かな？』

同僚『そんな不思議なことがおこってたなんてな。で、身に覚えがないってことか。』

俺『ただ、声になんとかくだが、聞き覚えがあるような気がするんで気にしないようにもできなくてな。』

同僚『声に聞き覚えがあるってのもな。』

俺と同僚は明日のプレゼンに向けてあまり深酒すること無く早めに切り上げた。 アパートに帰るとシャワーを浴びて寝ることにした。 その間にも携帯電話には何回かの着信とメールが入っていたが、いまは気にしている場合ではない。 全ては明日のプレゼンしだいだ。

次の日、客先でのプレゼンは大成功とっていいほどだった。上司も満足してくれた。

そして、その日を境に変な着信とメールは無くなった。

客先との取引はその後順調に進み俺と同僚は1年後に大抜擢でけっこうなポストに就くことができ給料も上がり、その後に行くようになった、たまたま知り合った娘と結婚することになった。

その頃になると仕事でもプライベートでも銀座の店にも行くようになった。

そんな生活が続いていた中、ある日の朝妻がぼそとこぼした。

妻『へんね～ 昨日貴方の電話が混線してたのかしら。別の人がでたの。』

俺『昨日はごめんな。急に取引先との接待が入ったものだから。』

妻『それで、電話したんだけど貴方の電話に繋がったはずなのに相手はアタシを知らないみたいだったの。』

俺『ふ～ん、そんな事もあるのか？』

妻『そうそう、前の携帯電話が壊れちゃったから新しい電話にしたの。で、どうしても同じ番号じゃできなくて電話番号が変わったの教えてなかったわね。』

俺『教えてくれれうかい？』

そして妻が教えてくれた電話番号を携帯電話に入れてみる。 何となく見覚えがある番号だったが、あまり気に留める事無く出社した。

同僚『おはよう。いつも早いんだな。』

俺『おはよう。まあな。朝から起こされるんでな。』

同僚『そういえば、昨日は珍しくメールに返信してくれなかったんだな。』

俺『メール？おまえからのメールは受信してないぞ。』

同僚『そんなはずはない。確かにメールしたんだ。たまたまお客さんといつもの店で会ったんで呼ぶつもりで、ほら。』

そう云ってメールの送信履歴をみると確かに俺宛になっている。念のためにもう一度送信してもらおうと今度は受信できた。

俺『あれ？メアド変えたのか？』

同僚『ああ、迷惑メールが多過ぎてな。』

俺『なんかみた事あるメアドだな。。。どれどれ・・・』

そう云って俺はメールの履歴を検索してみた。携帯電話は機種変更して前とは違っているが、履歴はパソコンに取っておいてあるのだ。

俺『あったぞ。おまへの新しいアドレスからのメールが。』

同僚『えっ！？ウソだろ。ゆうべ初めてそれも1通しか送信していないはずだ。』

俺『これを観てくれ。』

そう云って俺がみせた画面には確かに同僚の新しいメアドからの、いつもの店への誘いのメールが来ていた。3年前の日付で。そして、妻の新しい携帯電話からの着信履歴も3年前の記録に残っていた。

同僚『これっていつか昔話してくれたあれか？』

俺『みたいだな。』

やる事も無くなって俺は携帯電話をいじっていた。

ゲームもほとんどやりつくしたし、出会い系もいろいろとやってみたが、会える確率よりも金のほうがかかって続かなかった。

俺『つまんね～な～ 時間は有り余ってるのにやる事がなにも無くて暇を持て余す大学生ってのもな～。』

バイトをして暇を潰せば金を稼ぐ事にもなっているのだが、大学生のバイトなんて時間の割に安い。それにどうしてもバイトしなければいけないこともない。大学の仲間はバイト先で彼女を作ったりしているし、バイトで稼いだ金で合コンなんかに行っているらしい。

アパートで寝転んでてもつまらないのであては無いのだが、でかけることにした。

アパートを出て近所の公園に行ってみるが、ガキが遊んでいるだけだ。

公園で時間をつぶそうにもポケットとして暇つぶしをしているだけだ、アパートでポケットとするか公園でするかの違いだけだ。そろそろ夕方近くになり腹も減ってきたのでアパートに帰ろうと思ひ公園のベンチを立ち上がりふと足下を見ると携帯電話が落ちている。拾ってみるとつい最近発売されたばかりの話題の機種だ。落とし主が困っているんじゃないかとも思ったが、スイッチを入れても繋がらない。どうもSIMが抜かれているようだ。

俺はその携帯電話をポケットに入れると周囲を見回して足早に公園をでてアパートに戻った。

携帯電話のスイッチを切り、ジブンの携帯電話からSIMを抜くとその携帯に入れてみる。

スイッチを入れると携帯は当然のようにつながる。中にどんなデーターが入っているのが気になりメール受信箱、送信箱などからカメラフォルダまで漁ってみたが、何もデーターは入っていない。

俺『なんか、買ったばかりって感じだけどなんでSIM無しで落ちてたんだろう？』

とりあえずのところは使えそうなので使ってみる事にした。

次の日大学で携帯をいじっていると友達が話しかけてくる。

友『おっ！？どしたん？買ったのか、その携帯。』

俺『まあ、そんなとこだ。』友をちらっとみてから携帯に視線をもどす。

友『ちょっとみせてみろよ。』

友達に携帯電話を渡す。友達は「すげー、すげー」と言いながら携帯電話をいじっている。

いい加減いじったところで友達は携帯電話を返してくれた。

友『やっぱり最新機種はいいな～俺も変えようかな？』

俺『おまえは先月変えたばかりじゃね～か。』

友『そりゃそうなんだけどな。最新機種をみるとついな。』と苦笑いをした。

俺『おまえのガジェット好きも凄いもんな。』そう友達は最新の携帯とか電子ものが大好きなのである。

そうこうしているうちに講義の時間になり友達とは別れた。

俺『なんか面白い事ね～かな～』そう云って近くをみると、見たことも無い美人が座っている。俺『あんな娘が彼女だったらな～』俺はシャッター音に注意しながらその娘の写真を携帯で撮影した。

その日アパートに帰って講義中に撮影した写真を出して眺めてみた。やっぱり美人だ。いったいどの娘だろう、そう思いながら、携帯電話をいじっているとサブメニューの中に「現実化」という項目があるのに気がついた。

俺『現実化？なんだろう？』そう思いながらその項目を選び決定ボタンを押してみる。

すると突然携帯電話が光りだしアパートの部屋が急に明るくなった。

俺『なんだ、なんだ！？』

そして光が眩しくなってみれないほどになると、「ぼんっ！」と音がして光がおさまる。

俺『なんだったんだ？あれは？』何か変わった事はないか？と思って部屋を見渡す為に後ろを振り返ると、なんと携帯電話で撮影した彼女が立っている。

彼女『こんにちは。ご主人様。』と彼女が口を開いて話しかけてきた。

俺『えっ！？！？　ご主人様？』

彼女『だって、アタシは持ち主様から現実化されたんですもの。持ち主の貴方がご主人様ですわ。』

俺『って事は君はこの携帯電話からでてきたってこと。』そう云って携帯を覗いてみると撮影した写真が無い。

彼女『そうですわ。ね、何をしたらいいかしら？』

そう云うと彼女は俺に顔を近づけてくる。　思わず顔を覗くと、ツヤツヤの唇、まっすぐに見つめてくる視線、眼をしたに移すと比較的大きめの胸とキュンとくびれた腰が眼に入る。

俺『なんでもしてくれるのか？』

彼女『なんでも致しますわ。』

俺『じゃあ、ちょっと眼をつぶっててくれ。』

そう云うと彼女は眼をつぶる。　俺はそのまま顔を近づけて唇にキスをしてみた。嫌がる素振りは見せない。

俺『じゃあ、そこのベッドに腰掛けて。』　俺がそう云うと彼女はすぐ後ろのベッドに腰掛ける。ミニスカートから覗く太腿がキレイだ。　俺は彼女に近づくとキスをしながら胸元に手を持って行って彼女の胸を衣服越しに触ってみる。柔らかい感触が手に伝わる。彼女は相変わらずされるがままになっている。　そして、彼女の胸の感触を楽しんだ後、おもむろにミニスカートの下から太腿のお間に手を入れてみる。ちょっと戸惑った素振りはあるものの、抵抗はしない。　そのままの姿勢でこんどは太腿の奥に人差し指を入れていくとちょっと湿っている。俺はとうとう我慢できなくなり、ブラウスをたくし上げるとブラジャーの隙間から右手を入れて直接大きめの乳房を揉みながら、左手はパンティーの中に入れて直接アソコを刺激してみる。彼女は抑えているが、時々小さな声をあげる。彼女の右手は俺の股間にきて俺のものをジーンズの上からさすっている。

そのまま彼女の着ているものを脱がせて、と思った瞬間に彼女はふと消えてしまった。突然、煙のように消えてしまったのである。

俺『あれ?????? どこ行った?』そう言いながら携帯電話を覗くと彼女は携帯電話の中にいた。ただ、消える直前までの格好になっていた。まるで、出来の悪いAVのキャプチャーのようだ。

俺『こりゃあ、いったいどうなってるんだ???』

よく見てみたが携帯電話の中の彼女はミニスカート、ブラウスがたくし上げられてかなりそそり格好をしている、視線もなんとなくうるおっているようにみえる。ただ、待ち受け画面として使うわけにもいかない。

そう云えばと思ってもう一回メニューを出してみるが、「現実化」のところは文字が薄くなって選択できないようになっている。

俺『へんだな～さっきは選択できたのに・・・』

仕方が無いので他の機能をいじってみるが、他に怪しいところは無さそうだった。

俺『変な携帯電話だな。この機種全部にこんな機能が付いてるのかな?』

俺はよく考えてみる、現実化のメニューを選んで押したところ携帯電話の中の写真が現実に見える。ただ、時間が経つと何故かもとにもどってしまう。これでは、お金を出すわけにもいかない、財布に入れておいても使いたいときには元に戻ってしまうのだ。食事にしてもそうだ。食べた時はいいが、時間が経つと胃から消えてしまうのだ。腹一杯も長くは続かないようだし。

さっきのように女の子を出してもちょうどこれからってときに消えてしまったのでは、逆に欲求不満が増加されてしまう。実際にこの中途半端な下半身はどうしろというのだ。

考えても考えてもいい方法が浮かばない。とりあえずのところはしょうがないのでシャワーを浴びて寝ることにした。

なかなか寝付けなかったが、なんとか寝れたようで朝日で目を覚ます。

俺『なんか寝不足だな～　ところで今は何時だろう?』と云いながら、携帯電話を開いてみると大学へ行くまではまだ時間があつた。そこで、彼女の写真をもう一度観てみることにした。昨日の途中までのエッチな格好で写真はある。

試しにメニューを選んでみると「現実化」が選べるようになっていた。ある程度の時間が経つと選べるようになるらしい。そこで俺は現実化の選んでボタンを押す。

昨日と同じように携帯電話は光って、そのうちに光がおさまると昨日消える直前のかっこうの彼女がベッドにいる。

俺はそのまま昨日の続きをすることにした。

なんとか途中を省略して最後まで逝くことができた、と思った瞬間にまたしても彼女は消えてしまった。

携帯電話の中の彼女はベッドの上でのその時の格好で戻っていた。

俺『まったく、これからって時にこれかよ・・・　最後まで逝くのに何回こんなことをすりゃいいんだろ。』

俺はとりあえずシャワーを浴びて大学に行くことにした。時間がせまっていたので朝飯は抜きにした。

大学に着くと真面目に授業に出ているふりをしながら、同じ講義にでている可愛い娘を選んで

携帯電話で写真を撮りまくった。　これだけ撮っておけば毎日とっかえひっかえいろんな娘とおいしい思いができるかもしれないと考えたからだ。

大学の講義も終ってアパートに戻ると携帯を取り出して中の写真を確認する。

俺『う～ん、どの娘にしよう？』　散々迷ったあげく俺は今日の2時限目の理系講義で撮影した写真を選んで「現実化」してみることにした。

そこからの展開は昨日と同じだった。　だが、少し考えた俺は前戯無しで最後まで逝けないか試めしてみることにした。　ただ、それには新しく現実化した娘は着ているものが多く脱がせるのに時間がかかりあえなく失敗に終わった。

俺『あと少しだったのにな～　惜しいな～　俺の準備は万全だったんだけどな～』

いろいろと考えてみて最初から裸の状態で撮影できれば一番手っ取り早いとも思ったが、さすがに裸で講義を受けている娘はいないし、まさか女風呂の盗撮でもないだろう。　またちょうど寒くなり始めなこともあり、厚着をしている娘が多い。

これでは自分の欲求ばかりが多くなるいっぽうである。　なんとかして現実化している時間を長くすることはできないのだろうか？とも考えたが、そもそもどんな原理で現実化しているのかも判らないのではどうしようもない。

そう考えてもう一回写真を見てメニューを選んでみると小さく「ヘルプ」の文字があることに気がついた。

俺『ヘルプメニューまであるんだ。これをみれば何かヒントでもあるのかな？』

そう云いながらヘルプメニューを開いてみて、読んでみたあと、実際にやってみたが・・・・・・・・。

「現実化メニューで現実化している時間は3分に限られています。また、現実化を一回行くと次ぎに実行できるのは6時間後になります。現実化の時間を長くしたい場合には現実化メニューを実行する前に、エネルギー吸取りメニューを実行して貴方の身体から現実化に必要なエネルギーを携帯電話に蓄積する必要があります。貴方の身体からエネルギーを吸取った時間と同じ時間だけ現実化の時間を長くすることができますが、エネルギーを吸取ることで貴方自身の元気が無くなり、最悪は死ぬことがありますのでご注意ください。吸取ることのできる最大時間は携帯電話に表示されますので、最大時間内で設定してください。」と書いてある。

俺は吸取りメニューから最大時間を覗てみると確かに20分ほどは吸取りができるらしい。ただ、20分に設定すると死ぬ可能性があるらしい。そこで10分に設定してみたが、吸取りを実行すると身体がだるくなって動けなくなってしまう。　回復するのに3日ほどかかりその間はほとんど寝込んでいた。回復した後一番好みの娘を選んで確かにおいしい時間を10分過ごすことはできた。ただ、10分のために3日潰すのもどうかと思う。　その後に再度吸取りメニューをみると最大時間が減っている。

前の持ち主がこの携帯電話を落としたのではなく、公園に捨てたのではないかと思い始めている。

俺もどっかに捨てにいきたいと考えている。

縁？

日曜日の朝はいつも気怠い感じが抜けない。　ゆうべ深酒したとかそういう事も女の子と遊んだとかいう理由でもあれば、余韻にひたることもできるのだが、俺には彼女もいなければ一緒に飲みに行くような友達もいない。

普段から友達付き合いとか人と接する事が苦手で1人でいることのほうが多いのだが、土曜日の夜は深夜のバイトをしている事から疲れてベッドに倒れ込むように寝ている。　だが、日曜日は部屋の掃除やら洗濯やらやらなければいけないことがいっぱいあるので、早くから起きているのだがなかなかベッドから抜け出すことができないのだ。

俺『あ～あ、掃除洗濯してくれる彼女とかできないかな～』と呟いてみても何もおこるわけではない。

一度疲れが溜まり過ぎてどうしても動けないときに派遣家政婦を頼んだことがあるのだが、とんでもない娘だった。掃除も洗濯も中途半端極まりない。注意していたら泣き出して途中で放り出して帰ってしまう始末だ。

挙げ句の果てには派遣センターにあること無いこと報告したらしく、それ以来派遣センターに頼んでも遠回しに断られている。　そう考えていたところバッグの中から何かの音がする。　これでは起きないわけにはいかない。

俺『あれ？あの音ってなんだっけ？』

疲れた身体に鞭打つようにして起き上がる。　バッグの中をみると見慣れない携帯電話が入っている。音の正体は携帯電話のアラーム音だったようだ。開いてみると見慣れない携帯電話のはずなのだが、俺が普段使っているようだ。履歴もメールも記憶にある。ただ、外観は初めてみるような気がする。　普段からこういうのには無頓着なので買った時の記憶もさだかではない。そうそうそれよりも・・・掃除、洗濯と思い、早速掃除をしようと部屋を見渡してみるとすっかりキレイになっている。　洗濯をしようといつも脱ぎっぱなしの衣服を入れているカゴをみたが何も入っていない。窓をみると洗濯物が干してある。

俺『あれ？？？いつ掃除、洗濯したんだ？』　いつも散らかしっぱなしの部屋の中もこざっぱりと片付いている。

どう考えてもへんだ。　俺は一人暮らしで部屋の鍵は親にも渡していない。渡してあったとしても親がくることはありえない。　と云って泥棒とか空き巣のたぐいではなさそうだ。　貯金通帳も貯金箱もあるし、だいいち部屋を片付けていく空き巣なんて聴いたことがない。　考えても判らないので冷蔵庫を開けて朝ご飯の準備をすることにした。

俺『え～と、何か買い置きの野菜とかあったっけ？？？』といいつつ冷蔵庫を開けると野菜やら肉やらが詰まっている。買った記憶はないのだが・・・

俺『えっ？なんで？知らない間に盗んできたのか？』と思って財布を開けてみると現金が少し減っていてその代わりに24時間営業のスーパーのレシートが入っていた。レシートの金額は財布から減った分とほぼ同じ額みたいだ。

俺『無意識のうちに買い物でもしてたのか？』

どう考えてもわからないだが、どうやら無意識のうちにスーパーで買い物をして、掃除、洗濯をしたらしい。一種の夢遊病にでもなってしまったのだろうか？ 俺は朝食を作るのも忘れて考え込んでしまった。

だが、どう考えても判らないものはわからない。

まあ、特に問題があるわけではなさそうだし犯罪が関係しているようでもないので、2度寝することにした。

ベッドに倒れ込むように入るとそのまますぐに寝入ってしまう。

2度寝の最中に変な夢をみた。 いないはずの彼女が俺にはいてデートしている最中だった。

どっかのレストランで食事をして持っていないはずの車で郊外の道を走り、景色のいいところを周り、そのままファッションホテルに入り、彼女と一緒に風呂に入ってから、そのままベッドインして、全てが終わったところで膝枕で寝る彼女の寝顔を覗いて寝入るところで眼が覚める。俺『あ～あ、あんな彼女がいたら人生はもっと楽しいのかな～』と考えたところでふと気がつくと、下半身が冷たい。

俺『あれ、、、なんだいつの間に？』身体をさわってみると着ていたはずのパジャマは全部脱いでいる。さらに下半身のあたりが濡れている。 しかたがないのでベッドからでるとパンツを履き替えてから外出着に着替える。

特に行くあても無いのだがアパートでゴロゴロしていてもつまらない。 やるはずだったことは全部済んでいる。

ついでにちょっと電車ででかけることにした。 大学にはいってこのアパートを借りてから大学とアパートの往復ばかりでどこにもでかけていない。電車でちょっと行くと眺めのいいところもあるらしい。

アパートを出て駅までは歩きだ。 駅前商店街も荒びれてはいるがあってスーパーもあるので、生活するものの大半はここで購入している。商店街を抜けて駅のホームで電車を待つ。

待っている間はヘッドフォンで音楽を聴きながら大抵は本を読んでいる。

その日も本を読みながら着いた電車のドアから乗ろうとしたが、降りてくる人とぶつかってしまった。完全に不注意だった。

俺『あっ、すみません。前をよく見てなくて。ごめんなさい。』

娘『いえ、大丈夫ですよ。それより早く乗らないと電車がでちゃいますよ。』と彼女が云った瞬間に電車のドアが閉まる。

俺『あっ！ま、いっか。次の電車でも間に合うか。ところで、お怪我はありませんでしたか？』

娘『大丈夫ですよ。ところで、電車乗れませんでしたね。お時間は大丈夫なんですか？』

俺『大丈夫っす。いつも2本くらい早い電車に乗っているんで、次でも間に合います。』

俺はそう答えて彼女を覗いた。その瞬間、息が止まるかと思うほど驚いた。 さっき夢の中にでてきた娘にそっくりだった。そっくりなんてものじゃないそのまま夢から出てきたとしか思えない。

娘『それじゃあ、お気をつけて。』そう云って彼女は頭を下げて改札へ向かう。俺はつられるように会釈してホームに立って彼女を見送った。

俺『本当にそっくりだったな～ 夢の中からでてきたとしか思えない。また、会えるといいんだけどな～』

次の電車に乗って有名だと云うところに行ってはみたが、彼女のことが気になって元の駅に引き返してきた。

彼女はここで降りたという事はこの近くに住んでいるか働いているかだろう。

商店街を歩いて店を覗いてみるが彼女を見つけることはできなかった。

俺はアパートへ戻ることにした。

アパートへ戻り昼飯を作って食べる。その後ちょっとした買い物をするために商店街に向かった。

俺『この街のどっかに用事で来てただけなのかな～』

俺は彼女のことを考えながら歩いていたのだが、注意力散漫でまたしても人にぶつかってしまった。1日に2度も人にぶつかるなんて酷過ぎる。

俺『どうもすみません。』と、ぶつかった人を観ると今朝の彼女だった。

彼女『奇遇ですわね。同じ人と2度もぶつかるなんて。』

俺『1日に2度も同じ人にぶつかるなんて、本当にすみません。』謝ってから少し考えて、俺は思い切って話しかけてみることにした。

俺『この街へはお買い物で？』

彼女『いえ、ちょっとした用事でしたの。これから帰るんです。あなたはこの街にお住まいで。』

俺『ええ、ここから5分くらいのところに住んです。』

彼女『この街もちょっと荒びれちゃいましたよね。昔は住んでたんですが、都合で引っ越しまして。』

俺『俺は引っ越してきたばかりで何も知らないんですが、前に住んでいたところよりは賑やかですけどね。』

彼女『そうですか。でわ。』

俺『じゃ。』そう云って別れた。

俺は買い物を済ませるとそのままアパートに戻りその日は部屋に籠って明日の講義の準備などをして過ごすことにした。これ以上人にぶつかってられない。

その日はそのまま夕食も冷蔵庫を漁って作り月曜の講義にそなえることにして、早めにベッドに横になった。

その日の夜観た夢は大学でのことだった。講義の中では相変わらず講義内容を少し飛ばしたことを教授が話していた。

前回の講義から1ページほど進んだところから始めるのだ。そして講義が終了すると次回の講義で

はテストをする、と話して教室をでるところで目が覚めた。

俺『夢の中のことで今日の講義臭いな。昼食が終わったら図書館に行ってみるか。』

そう1人呟くと朝食の準備を始める。その時にまた携帯電話が鳴り出す。なんだろう？と思って開いてみるとまたしてもアラーム音だ。こんなに頻繁にアラームを設定してたっけ？と思いながら。携帯電話を元に戻すと朝食を済ませ、アパートをでる。

駅から電車に乗り大学に行き講義を受けていた。その日の昼食は学食で食べることにして、学食に行って定食を頼んでテーブルについて食べていると、突然話しかけられた。

学生『隣、いいですか？』

俺『あっ、ああ。いいですよ。』学食で食べていて話しかけられたのは初めてではないが、かなり珍しいことだ。

学生『いつも一人で食べてますよね。他の人と一緒に食べているところを観たことが無いんですが？』

俺『人付き合いが苦手なんであんまり友人とかは作らないようにしてるんです。また、付合う時間もないし。』

俺『そんな俺に興味を持っても何もできませんよ。』俺はぶっさらぼうに続けた。

学生『私もそんな人付き合いはうまくないんですが、研究室の教授に聞いたら午後一の講義はあなたが一番成績が良いって事なんで、隣にいたほうが何か吸収できるかと思ひまして。ってこれはわたしの都合です。宜しいでしょうか？』

俺『俺の隣で何か吸収できるかどうかは俺にはわかりませんがね。』別に食事の邪魔とか勉強の邪魔をする気はなさそうだ。ホッとしてたまに話をするくらいならいいだろう。

学食で食べている最中に隣の学生はなにかと話しかけてきたが、俺は簡単に答えるだけでした。

食べ終わると隣の学生を置いてでていこうとすると彼はついてくる。

俺『おいおい、そのままトイレまでついてきそうな雰囲気だな。』

学生『いや～そこまではしませんよ。ただ、あなたが講義を受けるときに隣に座れるとは限らないので、できるだけ離れないようにしているだけです。他に方法でも？』

彼がそう云うので俺は一つ提案をした。

俺『じゃあ、次の講義の時に2つ並んだ席を用意してくれればいいじゃないか。前から3列目の中心から4つ以上離れていないところをね。そこが一番教授の講義が聞き取りやすい場所だから。』

学生『でわ、そうさせていただきます。あなたが教室に入ってきたら声をかけますよ。隣にきて下さいね。』

俺『そうしてくれるんなら必ず行きましょう。ちょっと俺は調べ物があるんでね。次の講義用の資料だ。』

俺『席を取ってしてくれるなら御礼代わりにコピーをあげるよ。』

学生『ありがとうございます。では、教室で。』

俺は学食をでて図書室にいきある本を見つけてから、ページのコピーを撮りそのコピーの余白に重要な点をいろいろと書き込んでいった。書き込みが終ったのは講義開始の5分前、彼のコピーを撮ると教室に向かう。

教室に着くと彼は約束とおりの席を取っておいてくれた。

俺『ありがとう。これはコピーだ。今日の授業のポイントはこの中にあるはず。書き込みは俺なりの資料への考察だ。余計だったかな？』

学生『いや、そんなことは無いです。なるほど〜こういう準備が周到なんですね。』

そのうち講義が始まる。予想通り前回の講義からちょっと進んだところから始めている。これはこの教授の癖なんだ。途中は自分で調べろという意味合いらしい。準備をしていないとすぐについていけなくなるのだが、準備する学生は珍しいらしい。

講義の終わりを知らせるチャイムになる。教授は次の講義で簡単なテストをすると告げると教室をでていった。

学生『さすがですね。次のテストにはまいったけど。』

俺『いや、次のテストの範囲はだいたい予想つく。』

学生『ふ〜ん、そんなもんですか？』

俺『いままでの教授のテストを振り返ればわかることさ。』

そういうと俺は彼と別れて次の講義の準備にかかる。次の講義に行こうとして教室をでるところで教科書をみたまま出ようとしたのがいけなかった。またしても人にぶつかってしまった。昨日から3回目だ。いくらなんでも多過ぎだろう、と自分を責める。

俺『すいません。すいません。このところちょっとぼーっとしてまして。』と、云いつつぶつかった人を観るとまたしても彼女である。昨日から同じ人に3回もぶつかるのは奇跡に近いだろう。

彼女『いえ、いいんです。ところであなたも同じ大学でしたのね。』

俺『はい。貴女もでしたか。本当にすいません。』

彼女『いえ、いえ、いいんですって。でも、昨日から3回も同じ人にぶつかるなんてよっぽど縁があるんですね。』

俺は彼女の方からそんな言葉がでるとは思ってもよらなかった。

俺『そうですね〜 どうもすいませんでした。そろそろ教室を移動しないと。』と、云って歩き始めると彼女も同じ方向に歩き始める。

俺『あれ、次の講義って同じですか？』

彼女『あなたが抱えてる教科書と同じのを持ってるんですけど？』いたずらっぽく彼女が笑う。確かに小脇に抱えているのは同じ教科書だった。

せっくなので次の講義は隣に座らせてもらって受けることにした。俺はこの講義でもかなり上位の成績を取っているので、教授が話している内容の要点だけをノートに、教科書に書いていく。時々彼女が聞いてくる。

彼女『いまのところって、教科書のどの文法のところかわかる？』

俺『いまのって、ここ？』と聞き返すと彼女が眼で「そうだ。」云うので、メモを取った文章に下線を引いて注釈を書き込んであげた。

彼女『ああ、そういう事だったのね。ありがと。』と、御礼にウィンクをもらう。

授業が終わってから彼女が話しかけてきた。

彼女『ありがとう。この教授の講義ってたまに意味不明な事を云うからわからない事があって困ってたの。』

俺『この講義は事前準備でこの辺をやっておけば大丈夫なんだけどね。』と教科書に線を引いてみる。

彼女『ふ〜ん、そうなんだ。ねっ、ところであなたはこのあとは講義あるの？』

俺『いや、無いけど。』

彼女『じゃあ、なんか食べに行かない？』

俺『いいけど、何食べる？』

彼女のほうから授業で助けてもらった御礼に食べに行きたいと言い出してきた。

夕方になって一軒の居酒屋に入る。彼女も少しなら酒を飲めるというので二人で乾杯してつまみながら、酒を飲んだ。

だが、彼女はビールをコップ1杯飲んで時点で既に酔っ払ってしまった。　　そうそうに居酒屋をでるがどうにもしようがないので俺のアパートに連れて行く事にした。

アパートに着くと彼女は水を飲んで少し酔いを醒まし、シャワーを浴びたいと云うので、そのままシャワーを浴びてもらった。だが、着替えがない。俺のパジャマをだしてあげたがやはり大きいみたいだ。

そうこうしているうちにだんだんと夜も更けてくる。だが、彼女は帰る気配をみせない。

彼女『なんかれ〜　帰るのめっどっちい〜』

俺『家の人心配しないのかい？』

彼女『家〜？一人暮らしなんらも〜ん。』どうもまだ酒が残っているようだ。

そのうちにちょっとづつ俺のほうに寄ってくると、隣に座り眼を潤ませたまま、突然キスされた。

俺はそのまま彼女をベッドに運ぶ。彼女はベッドに寝転ぶとそのままパジャマを脱ぎだしていく。我慢はできなかった。

次の日の朝彼女の方が先に起きていた。

彼女『おはようございます。夕べはいい気持ちだったわよ。』

俺『おはよう。こちらこそ。でも、よかったの？』

彼女『うん、最初にぶつかった時から気になってたの、あなたのことが。』

彼女はそういうとキスをして云った。

彼女『ねえ、一緒に住まない？』ずいぶんと急な申し出である。　だが、なんとなくそんな気はしていた。

その時、携帯電話のアラーム音が聴こえた。彼女が云う。

彼女『そのアラーム音ってあなたが設定したの？』

俺『いや、いつの間にか設定されていたんだ。自分でアラーム設定した記憶が無いんだ。』

彼女『そう？やっぱり、そうなんだ。』

そう云うと彼女が話し始めた内容は・・・

その携帯電話は元々は彼女が使っていたものらしいのだが、ある日覚えも無いのに無くなっていた。いくら探しても出てこないで別の携帯電話に変えたらしい。

だが、その携帯電話を持っている時には不思議なことが頻繁に起きていたとのことだった。

覚えも無いのに買い物をしていたり、部屋の掃除、洗濯が済んでいたりと、少々気味が悪かったらしい。で、彼女はアラームを設定していた。起きなきゃいけない時間、食事を作り始める時間などなど。

そして、近いうちに起こる現実をよく夢でみることがあったことなど。

その中には駅のホームで電車を降りようとした時にぶつかる男性がいて、その男性と将来を誓い合う仲になることも。

俺は繁華街からちょっと離れたところにある、雑居ビルの入り口にいた。

入り口を入ると郵便ポストが並んでいるところで、目指す会社がある事を確認する。

俺『ここで間違い無さそうだな。云ってたとおり地下1階にあるらしいな。』

俺はエレベーターは使わずに階段で降りることにした。

階段を降りるとエレベーターホールの脇に小さめのドアがある。　ドアの入り口には表札も何も無いがドア横の壁に貼紙がしてあって、会社名が書いてある。　間違いないことは確かめたがやはりちょっと躊躇した。どんな対応になるのかもわからない。ただ、ここまで来てしまった以上、手ぶらで帰るのもつまらない。そう思って呼び鈴を押す。　中から声がした。

女『どなたですか？』

俺『あの、ネットで予約したんですけど・・・』

女『あ、俺さんね、どうぞ鍵はかかってないから。』

俺は女の声だったので少し安心してドアを開ける。　中は小さめの事務所って感じで机が2つ並んでいる。その横にはロッカーがある。女の子1人以外はいないようだ。

女『ようこそ、いらっしゃいませ。で、お金は用意できたのかしら。』

俺『はい。ちょっと高めでしたけど、最新機種が格安なので。』と、俺は云って2万円をみせた。

女『そうね、普通の店の半額程度だから大学生でも都合できない額じゃないわよね。』そういうと、女の子は立ち上がってロッカーを開けて中から昨日発売されたばかりの最新機種の携帯電話をだす。

女『いちおうロックとかそんなのはかかってないから、俺さんが今持っている携帯電話からSIMを抜いて差込むと使えるようにはなっているわ。じゃあ、SIMを抜いて、古い携帯電話は約束とおりこちらで引き取るけどいいわね。』

俺は今使っている携帯電話の電源をOFFにしてSIMを抜くと女の子に渡す。新しい携帯電話を受取るのと引き換えに現金を女の子に渡した。　さっそくSIMを入れてみると使えるようになっていた。メールもネットも見れるし電話も問題無くかけられるのを確認した。

女『問題がないようならOKね。でも、気をつけてね。その携帯はちょっと曰くつくなの。何かは云えないけどね。まあ、命の危険とか怖い思いをすとかの類いではないから安心していいわ。』と、ネット上でやり取りをしているときに注意事項として聞いた内容を繰り返した。

俺『わかってます。それはもういいってほど聞かされましたから。じゃ。』

そう云って俺はその事務所をあとにした。

事務所のビルをでて歩きながら携帯電話をいじってみる。　別にどこも変わったところは見受けられない。

俺『曰く付きっていうから、盗品かキズだらけを想像したんだが、そうでもなさそうだな。良い

買い物をしたな。』

そう云いながら歩いていると突然の彼女からの着信があった。

俺『もしもし、俺ですが。』

彼女『ねえ、いまどこにいるの？アパートに来てみてもいいし。』

俺は彼女には何も云わずに携帯電話を取りにきたので彼女がしているはずもない。とりあえず近場の駅の名前を云って友人と待ち合わせているというウソでごまかした。

彼女は納得いかない話し振りだったが、特に約束をしていたわけでもなかったなのでその場は何とかやり過ごすことができた。ただ、彼女は夕飯を作ってくれるという。友達との約束があって遅れると云った手前すぐにアパートに帰るわけにはいかない。電話を切ってからどうしようか考えていたとこまたしても着信があった。

こんどは親しくしている悪く云えば悪友からだ。そう云えば悪友はこの近所に住んでいるはずだった。

俺『もしもし、どうしたん。』

悪友『いや、ちょっと暇ができたんでな。会って話でもしようかと思って電話したんだが、おまえ今どこにいる。』

偶然だろうか？考えてもしょうがないので悪友とは駅で待ち合わせで駅前のファミレスで会うことにした。

ファミレスで二人で話し込んでいたが、携帯電話をいじっているのを見て悪友がめざとく聞いてきた。

悪友『おい、どうしたんだよ。先月でたばかりの最新機種じゃねえか。みせてみろよ。』

俺『ほら。』そう云って携帯電話を渡すと悪友はいじり始めた。カメラを起動してみたり、ネットに繋げてみたりとやりたい放題だ。そうしているうちに悪友は突然他の席に向けて写真を撮っている。俺は小声で注意した。

俺『お、盗撮になっちゃうじゃないか、やめろよ。』

悪友『でもよ、これシャッター音消せるぜ。』そう云えば悪友が写真を撮っているときにシャッター音がしなかった。

俺『そういえば、そうだな。変だな。どれ、もういいだろ、返してくれよ。』俺は悪友から携帯を返してもらうと悪友が撮影した写真を見える。よく見るとちょっと離れた席に可愛い女子校生がいてその娘を撮影したらしい。

悪友『どうだい。可愛い娘だろ。』

俺『ああ、確かに可愛いな。こんな娘とあんなこととかしてみたいよな。』と、彼女の存在も忘れて呟く。

悪友『そんな事云ってると彼女さんにいいつけるぞ。』

そんな事を1時間ほど話しながら、ファミレスに1時間ほどいただろう。そろそろ良いかと思いファミレスをでると悪友と別れて俺は駅に行き、改札を通過してホームに向かおうとしたところを呼び止められた。

JK『あの、すいません。いま、お時間ありませんか？』

俺『え、何か？少しなら大丈夫ですけど。』よく見るとさっきファミレスで悪友が写真を撮った女子校生だ。

JK『あの・・・あなたが凄くアタシのタイプなの。電話番号とかメアド教えて頂けないかしら？』

突然の申し出に俺は面食らった。一体全体どういうことだろう？突然もて期でもきたのか？

JK『ねえ、だめ？』そういうとJKは俺の手を掴んで物陰に引っ張って行く。俺は手を掴まれたままあとをついて行く。

そして、物陰につくやいなやJKは突然キスをしてくる。ちょっと長めのねっとりとしたキスのあと、右手を俺の股間に這わせサワサワとさすってくる。俺も男なのでキスされながら股間をジューパンの上から刺激されれば当然の反応がやってくる。俺の反応を確認したJKはさらに物陰の奥へと俺を連れて行く。

JK『ここなら、誰もこないし、外からは見えないからいいでしょ。』

そういうとJKはもう一回キスをしながら、大きくなってきた俺の股間の感触を確かめるようにして、ベルトを外そうとする。

俺『ちょっと、待って。さすがにそれはやばいでしょ。』

JK『大丈夫よ。』俺の云う事を聞くどころか、ベルトを外してからジッパーを下し、パンツから露出させるとその前にしゃがみ込んで、口に含んだ。そのまま俺はされるがままの状態ですぐで事は終わった。

JK『電話番号はこれで、メアドはこれね。また、電話するわ。』JKはお別れのキスと云って、軽くキスするとそそくさとホームのほうへ走っていく。俺はと云えば半ば呆然として立っている。

俺『なんだだったんだ、いまのは。』携帯電話を見ると今の女子校生の電話番号とメアドが電話帳に記録されている。

アパートへ帰る途中の電車の中で俺は懸命に考えたが、理由はわからなかった。この携帯で「友達と会う」とウソをついたらそれが偶然起こった。カメラで撮影した女子校生のことを考えたらその通りのことが偶然できた。

これが、この携帯電話の持つ「曰く」ってやつかもしれないとも考えたがそうだとするとかなりやばいものかもしれない。この携帯電話を通して話す事が全て現実になったら考えると滅多な事は云えない。携帯電話で友達と軽口で云ったつもりがそのまま現実になる。カメラで撮影した写真に対して思った事も現実になるのだ。

そんな事を考えると頭が痛くなる。ちょっとした妬みで云ったつもりが現実になったら如何に重たくのしかかってくるんだろう。

だが、どう考えてもそんなことがあるわけがない。無理矢理いまの考えを否定してアパートに戻る。

俺『ただいま〜』

彼女『お帰りなさい。夕飯はできてるけど、シャワーでも浴びる？』

そう聞いた彼女だったが俺の携帯電話に気がついた。

彼女『あら、新しいのに変えたの？これ最新機種でしょ、高かったんじゃないの？』

俺『いや、格安で手に入るところ見つけたから。』

彼女『ふ〜ん、やっぱり新しいのはいいわね〜。ね、ちょっといじっていい？』

俺の返事も聞かずに彼女は携帯電話をいじりだす。

彼女『ふ〜ん、新しい機能とかいっぱいあるのね〜 それに動きが速いし、いいな〜。』

彼女『ね、電話してみていい？声を変える機能とかあるから試してみたいんだけど？』

そう云うと彼女は俺の携帯から自分の携帯に電話して、俺にでろという。

仕方が無いので遊びに付合う事にした。

彼女『え〜と、このボタンでいいのね。どれどれ。』そう云うと彼女は声を変えた。

彼女『もしもし、どう？高校生の頃の声に変えてみたんだけど。』

確かにいまの彼女の若い頃の声らしい。声のトーンが変わっていた。

彼女『ね〜お兄さん、アタシと遊ばない？とか云ったりして。はは。』

俺『何冗談云ってるんだよ。』そう云うと彼女から携帯電話を取り上げると電話を切った。

彼女『え〜、いいじゃない〜 冗談よ。』

彼女はそう云っていたがだんだんと彼女が若くなって行く気がする。何となくだが顔に幼さがでてきた。ちょうど大人と子供の間の高校生くらいに見える。胸の膨らみもまさにふくらみかけでこれから成長していきますって感じた。

彼女『なんか、へんな感じだわ。ね〜ちょっとエッチな気分になってきちゃった。ね、しょ！？』

そういうと彼女は服を脱ぎだす。見慣れたはずの彼女の裸だがいつもとは違っていた。彼女は高校時代はいまほど胸が大きくなってコンプレックスを感じていたと云っていたが、まさにそのとおりでいましているブラジャーが少し浮いている。

彼女『あれ？ブラジャーのサイズが変わってる。高校の時と同じくらいに胸が小さくなってる？』

だが、かまわず俺は彼女に近づきそのままですることにした。肌の感じもいままでと違ってピチピチ感が増している。これも携帯電話のせいなんだろうか？そんな事を考えながらもベッドに彼女ごとうつる。その晩は彼女の反応も違っていた。それがまた新鮮な感じでついつい何回もして、気がついた時は既に午前3時を回っていた。

俺は眠かったがこのままではいけないと思い、彼女にいまの年齢の彼女に戻るように携帯で二言三言話をさせてから寝込んだ。思った通り朝起きた時は彼女は元に戻っていた。高校生に完全に戻ったわけではないが、あのままではちょっとやっかいな事になってしまう。精神だけは今のまま身体が高校生では不都合もある。体形が変わってしまったては下着から服まで全部買い替えるハメになってしまう。

その後も彼女とはいろいろと携帯電話を使って変身してもらっては楽しんでいる。俺もイケメン

になったり別の性格になったりして楽しんでいる。

ただ、滅多な事が云えないため礼の携帯電話は彼女との遊び専用にして別に携帯電話を契約することになったのだが。

俺は繁華街からちょっと離れたところにある、雑居ビルの入り口にいた。

入り口を入ると郵便ポストが並んでいるところで、目指す会社がある事を確認する。

俺『ここで間違い無さそうだな。云ってたとおり地下1階にあるらしいな。』

俺はエレベーターは使わずに階段で降りることにした。

階段を降りるとエレベーターホールの脇に小さめのドアがある。　ドアの入り口には表札も何も無いがドア横の壁に貼紙がしてあって、会社名が書いてある。　間違いないことは確かめたがやはりちょっと躊躇した。どんな対応になるのかもわからない。ただ、ここまで来てしまった以上、手ぶらで帰るのもつまらない。そう思って呼び鈴を押す。　中から声がした。

女『どなたですか？』

俺『あの、ネットで予約したんですけど・・・』

女『あ、俺さんね、どうぞ鍵はかかってないから。』

俺は女の声だったので少し安心してドアを開ける。　中は小さめの事務所って感じで机が2つ並んでいる。その横にはロッカーがある。女の子1人以外はいないようだ。

女『ようこそ、いらっしゃいませ。で、お金は用意できたのかしら。』

俺『はい。ちょっと高めでしたけど、最新機種が格安なので。』と、俺は云って2万円をみせた。

女『そうね、普通の店の半額程度だから大学生でも都合できない額じゃないわよね。』そういうと、女の子は立ち上がってロッカーを開けて中から昨日発売されたばかりの最新機種の携帯電話をだす。

女『いちおうロックとかそんなのはかかってないから、俺さんが今持っている携帯電話からSIMを抜いて差込むと使えるようにはなっているわ。じゃあ、SIMを抜いて、古い携帯電話は約束とおりこちらで引き取るけどいいわね。』

俺は今使っている携帯電話の電源をOFFにしてSIMを抜くと女の子に渡す。新しい携帯電話を受取るのと引き換えに現金を女の子に渡した。　さっそくSIMを入れてみると使えるようになっていた。メールもネットも見れるし電話も問題無くかけられるのを確認した。

女『問題がないようならOKね。でも、気をつけてね。その携帯はちょっと曰くつくなの。何かは云えないけどね。まあ、命の危険とか怖い思いをすとかの類いではないから安心していいわ。』と、ネット上でやり取りをしているときに注意事項として聞いた内容を繰り返した。

俺『わかってます。それはもういいってほど聞かされましたから。じゃ。』

そう云って俺はその事務所をあとにした。

事務所のビルをでて歩きながら携帯電話をいじってみる。　別にどこも変わったところは見受けられない。

俺『曰く付きっていうから、盗品かキズだらけを想像したんだが、そうでもなさそうだな。良い

買い物をしたな。』

そう云いながら歩いていると突然の彼女からの着信があった。

俺『もしもし、俺ですが。』

彼女『ねえ、いまどこにいるの？アパートに来てみてもいいし。』

俺は彼女には何も云わずに携帯電話を取りにきたので彼女がしているはずもない。とりあえず近場の駅の名前を云って友人と待ち合わせているというウソでごまかした。

彼女は納得いかない話し振りだったが、特に約束をしていたわけでもなかったなのでその場は何とかやり過ごすことができた。ただ、彼女は夕飯を作ってくれるという。友達との約束があって遅れると云った手前すぐにアパートに帰るわけにはいかない。電話を切ってからどうしようか考えていたとこまたしても着信があった。

こんどは親しくしている悪く云えば悪友からだ。そう云えば悪友はこの近所に住んでいるはずだった。

俺『もしもし、どうしたん。』

悪友『いや、ちょっと暇ができたんでな。会って話でもしようかと思って電話したんだが、おまえ今どこにいる。』

偶然だろうか？考えてもしょうがないので悪友とは駅で待ち合わせで駅前のファミレスで会うことにした。

ファミレスで二人で話し込んでいたが、携帯電話をいじっているのを見て悪友がめざとく聞いてきた。

悪友『おい、どうしたんだよ。先月でたばかりの最新機種じゃねえか。みせてみろよ。』

俺『ほら。』そう云って携帯電話を渡すと悪友はいじり始めた。カメラを起動してみたり、ネットに繋げてみたりとやりたい放題だ。そうしているうちに悪友は突然他の席に向けて写真を撮っている。俺は小声で注意した。

俺『お、盗撮になっちゃうじゃないか、やめろよ。』

悪友『でもよ、これシャッター音消せるぜ。』そう云えば悪友が写真を撮っているときにシャッター音がしなかった。

俺『そういえば、そうだな。変だな。どれ、もういいだろ、返してくれよ。』俺は悪友から携帯を返してもらおうと悪友が撮影した写真を見してみる。よく見るとちょっと離れた席に可愛い女子校生がいてその娘を撮影したらしい。

悪友『どうだい。可愛い娘だろ。』

俺『ああ、確かに可愛いな。こんな娘とあんなこととかしてみたいよな。』と、彼女の存在も忘れて呟く。

悪友『そんな事云ってると彼女さんにいいつけるぞ。』

そんな事を1時間ほど話しながら、ファミレスに1時間ほどいただろう。そろそろ良いかと思いファミレスをでると悪友と別れて俺は駅に行き、改札を通過してホームに向かおうとしたところを呼び止められた。

JK『あの、すいません。いま、お時間ありませんか？』

俺『え、何か？少しなら大丈夫ですけど。』よく見るとさっきファミレスで悪友が写真を撮った女子校生だ。

JK『あの・・・あなたが凄くアタシのタイプなの。電話番号とかメアド教えて頂けないかしら？』

突然の申し出に俺は面食らった。一体全体どういうことだろう？突然もて期でもきたのか？

JK『ねえ、だめ？』そういうとJKは俺の手を掴んで物陰に引っ張って行く。俺は手を掴まれたままあとをついて行く。

そして、物陰につくやいなやJKは突然キスをしてくる。ちょっと長めのねっとりとしたキスのあと、右手を俺の股間に這わせサワサワとさすってくる。俺も男なのでキスされながら股間をジューパンの上から刺激されれば当然の反応がやってくる。俺の反応を確認したJKはさらに物陰の奥へと俺を連れて行く。

JK『ここなら、誰もこないし、外からは見えないからいいでしょ。』

そういうとJKはもう一回キスをしながら、大きくなってきた俺の股間の感触を確かめるようにして、ベルトを外そうとする。

俺『ちょっと、待って。さすがにそれはやばいでしょ。』

JK『大丈夫よ。』俺の云う事を聞くどころか、ベルトを外してからジッパーを下し、パンツから露出させるとその前にしゃがみ込んで、口に含んだ。そのまま俺はされるがままの状態ですぐで事は終わった。

JK『電話番号はこれで、メアドはこれね。また、電話するわ。』JKはお別れのキスと云って、軽くキスするとそそくさとホームのほうへ走っていく。俺はと云えば半ば呆然として立っている。

俺『なんだだったんだ、いまのは。』携帯電話を見ると今の女子校生の電話番号とメアドが電話帳に記録されている。

アパートへ帰る途中の電車の中で俺は懸命に考えたが、理由はわからなかった。この携帯で「友達と会う」とウソをついたらそれが偶然起こった。カメラで撮影した女子校生のことを考えたらその通りのことが偶然できた。

これが、この携帯電話の持つ「曰く」ってやつかもしれないとも考えたがそうだとするとかなりやばいものかもしれない。この携帯電話を通して話す事が全て現実になったら考えると滅多な事は云えない。携帯電話で友達と軽口で云ったつもりがそのまま現実になる。カメラで撮影した写真に対して思った事も現実になるのだ。

そんな事を考えると頭が痛くなる。ちょっとした妬みで云ったつもりが現実になったら如何に重たくのしかかってくるんだろう。

だが、どう考えてもそんなことがあるわけがない。無理矢理いまの考えを否定してアパートに戻る。

俺『ただいま〜』

彼女『お帰りなさい。夕飯はできてるけど、シャワーでも浴びる？』

そう聞いた彼女だったが俺の携帯電話に気がついた。

彼女『あら、新しいのに変えたの？これ最新機種でしょ、高かったんじゃないの？』

俺『いや、格安で手に入るところ見つけたから。』

彼女『ふ〜ん、やっぱり新しいのはいいわね〜。ね、ちょっといじっていい？』

俺の返事も聞かずに彼女は携帯電話をいじりだす。

彼女『ふ〜ん、新しい機能とかいっぱいあるのね〜 それに動きが速いし、いいな〜。』

彼女『ね、電話してみていい？声を変える機能とかあるから試してみたいんだけど？』

そう云うと彼女は俺の携帯から自分の携帯に電話して、俺にでろという。

仕方が無いので遊びに付合う事にした。

彼女『え〜と、このボタンでいいのね。どれどれ。』そう云うと彼女は声を変えた。

彼女『もしもし、どう？高校生の頃の声に変えてみたんだけど。』

確かにいまの彼女の若い頃の声らしい。声のトーンが変わっていた。

彼女『ね〜お兄さん、アタシと遊ばない？とか云ったりして。はは。』

俺『何冗談云ってるんだよ。』そう云うと彼女から携帯電話を取り上げると電話を切った。

彼女『え〜、いいじゃない〜 冗談よ。』

彼女はそう云っていたがだんだんと彼女が若くなって行く気がする。何となくだが顔に幼さがでてきた。ちょうど大人と子供の間の高校生くらいに見える。胸の膨らみも心なしか小さくなりまさにふくらみかけでこれから成長していきますって感じだ。

彼女『なんか、へんな感じだわ。ね〜ちょっとエッチな気分になってきちゃった。ね、しょ！？』

そういうと彼女は服を脱ぎだす。見慣れたはずの彼女の裸だがいつもとは違っていた。彼女は高校時代はいまほど胸が大きくなってコンプレックスを感じていたと云っていたが、まさにそのとおりでいましているブラジャーが少し浮いている。

彼女『あれ？ブラジャーのサイズが変わってる。高校の時と同じくらいに胸が小さくなってる？』

だが、かまわず俺は彼女に近づきそのままですることにした。肌の感じもいままでと違ってピチピチ感が増している。これも携帯電話のせいなんだろうか？そんな事を考えながらもベッドに彼女ごとうつる。その晩は彼女の反応も違っていた。それがまた新鮮な感じでついつい何回もして、気がついた時は既に午前3時を回っていた。

俺は眠かったがこのままではいけないと思い、彼女にいまの年齢の彼女に戻るように携帯で二言三言話をさせてから寝込んだ。思った通り朝起きた時は彼女は元に戻っていた。高校生に完全に戻ったわけではないが、あのままではちょっとやっかいな事になってしまう。精神だけは今のまま身体が高校生では不都合もある。体形が変わってしまったては下着から服まで全部買い替えるハメになってしまう。

その後も彼女とはいろいろと携帯電話を使って変身してもらっては楽しんでいる。俺もイケメン

になったり別の性格になったりして楽しんでいる。

そして新しい使い方も考えた。宝くじを買ってきては携帯電話を通して彼女に『1等が当たった。』というと本当に当たる事がわかった。ただ、あんまり頻繁にやっていると怪しまれかねないし、そんなに欲もない。日々暮らしていけて、たまに旅行にでも行ければいいと思っているので、1回当てたら次は半年以上間をあけることにしている。

あとは、滅多な事が云えないため礼の携帯電話は彼女との遊び専用にして別に携帯電話を契約することになったのだが。

そんな気ままな暮らしを1年ほど続けたある日携帯電話がブルッと震えるとそのまま電源が入らなくなってしまった。

俺『あれ？おかしいな、電源が入らない。故障でもしたのかな？』そう云っていじっていると突然目の前が暗くなった。目の前には何も無い。真っ暗なところにポツンと立っている感じだ。

俺『え〜ここ一体どこだろう？』

真っ暗闇で周囲には何も見えない。どっかから彼女の声がする。

彼女『あれ？俺君？どこ行ったのかしら？変ね〜さっきまでそこにいたのに。』

俺は声を限りに叫んだが彼女には聴こえないらしい。

そのとき隣から変な声が聞こえた。

携帯『いらっしゃい。あなたで3人目だよ。』

俺『え？いまのは誰の声だ？誰かいるのか？俺はどうなったんだ？』

携帯『あなたはいま私の中にいるのさ。散々願いを叶えてきたんだ。あなたのエネルギーをもらおうと思ってね。』

俺『おまえは誰だ？』

携帯『あなたに1年前買ってもらった携帯電話さ。』

俺『エネルギーってどういうことだ。』

携帯『あなたが私の中にいる事で私はあなたの生命エネルギーを吸って電源が動く事ができるのさ。』

俺『俺の生命エネルギー？吸われた俺はどうなるんだ？』

携帯『もちろん死ぬ事になるかな？別の考え方では形を変えて私の中で生きるって事になるかな？あなたの意思も自覚もないままだが。』

俺『そんな事があるのか？うそだろ。』

携帯『うそなんかじゃない。おまえがこの携帯電話を買った時に曰く付きって聞いただろう。その曰くってのは持ち主が立て続けに行方不明になるって事だったのさ。全員私の中でエネルギーを吸われたただけだがね。』

携帯『いつ私の中に取り込んでもいいんだが、少しくらいはしてあげようと思って1年間は持ち主の願いが聴こえた時に叶えているんだがね。願いを叶えるのにけっこうエネルギーがいる。おまえさんの願いはかわいいものばかりだったから楽だったがね。』

どうやら、俺はこの中から出る事はできないらしい。そして、エネルギーを吸われて行方不明者の一人に仲間入りするらしい。

俺『はあ。』 俺は預金通帳を観てため息をついた。

次の給料日まではまだ日があるというのに、つい買ってしまった携帯電話。 新機種が発売されたというのでちょっと店に行ったのがまずかった。 いままでの機種と違って動きは早いし画面も大きくてキレイだ。「いいな～」と思ってたら、お店のお姉さんの笑顔に背中を押されて買ってしまった。

ただ、前に買った携帯電話の残債があったのでそれを一括で払わなければいけなかった。それもけっこうな額だったのだが、後先考えずに思わず払って最新機種にしてしまったのだ。

俺『まいったな～ 来月彼女と温泉旅行行くつもりで貯めといた金なんだけど。これじゃ諦めてもらうしかないな。』

彼女にはいろいろと部屋の掃除とかやってもらっているので、温泉旅行に連れて行くと云ってしまっていた。

俺『これで携帯電話買ったから行けなくなった、って云ったら怒るだろうな～ 呆れ返っちゃうかな～』

俺には出来過ぎの彼女だと思っていたし、友達からも同じように云われていた。 ちょっと遅れたが彼女への誕生日プレゼントのつもりでもあった。

考えてもいい案は浮かばない。

俺『ちょっとバイトでもするしかないかな？』

そう思って携帯電話でネットでバイトを探してみた。 バイトで検索するとけっこうな結果がでてくる。 その中から良さそうなを選んで応募のメールをしてみるが、ほとんどが時間的に無理、或は場所が無理なものが多かった。

また、割のいいバイトは既に募集を締め切っているものも多かった。

俺『なんかね～かな～。』そう云いながら探していると「携帯電話で出来る、割のいいバイトあります。」と書かれた広告が見つかった。携帯電話だけでできるのなら、時間を気にすることも無い。時給は1,000円程度を割といい。これなら1週間もやれば温泉旅行代全部とは云わないまでもかなりの部分を稼げるだろう。 さっそく応募のメールを送ってみるとほどなくして返信のメールでバイトが始められる事になった。

仕事の内容も事細かに書かれている。 内容は「指定された番号に電話をかけて相手がでたら、切る。」或は「メールで指示された内容を一方的に話して切る。」というごく簡単なものだった。しかも電話をかける時には必ず指示された番号を先に付けてかけるので、自分の電話番号が相手に知られることはないらしい。

俺『電話をかけるのか・・・仕事中だとちょっと苦しいな。でも、トイレに行くふりをすればできないことはないか。』

そしてその日からそのバイトを始める事にした。バイト代は自分の指定した金額になったら自分の口座に振り込んでもらうらしいが、小額の場合は振込料金がバイト代から引かれるらしい。俺

は2万円で振り込んでもらう事にした。

早速次の日の朝メールが届く。最初の電話は「相手が出たら切る。」という内容だった。こんな楽なバイトも無い。電話して相手がでたら切ればいいのだ。なんとなくワン切りで嫌がらせの電話をかけているみたいだったが、相手の事は何も知らないのだ。そう気にする事はない。そのうち指定された内容を一方的に云って切る、という内容の指示もくるようになってきた。内容を観て驚いた。明らかに嫌がらせの電話だ。しかも嫌がらせに心を込める為の練習用の電話番号までついてくる。俺は嫌だったがこのバイト代がかなり効率がいいので金欲しさに続ける事にした。

電話をかけて相手がでたら一方的に怒鳴り散らして電話を切ればいいのだ。そのうちだんだんとそれにも慣れてきて面白くなってきた。まったく知らない相手に怒鳴るだけで金になる。

だが、このころから何となくだが、彼女も会社の同僚も俺を避けるようになってきているような気がする。

毎日のように怒鳴っているから顔でも険しくなってきたのかとも思ったが、そうでもないらしい。初対面の人とはなんということも無く接している。だが、2～3回会ううちに段々と疎遠になっていく。

とうとう彼女とはお金が貯まる直前にささいな事で喧嘩して別れてしまった。彼女の最後の言葉は『あなた普段何してるのかわからない、なんか性格が変わったんじゃない？もうお付き合いできないわ。さようなら。』と云われた。

俺は訳もわからないまま別れたが不思議と寂しいとは思わなくなっていた。

なんとなくせいせいした気分だった。会社はと云えば別に仕事の話は普通にしているし、余所余所しいだけで特に仕事に支障がでているわけではない。前はあれほど飲みに誘ってくれた同僚から誘われなくなったのは一抹の寂しさを感じたが、それもすぐに慣れた。

そんなある日俺はアパートで新聞を何気なくながめていた、たいした記事も無いと思っていたがふとある記事に目が止まる。

「現代人のうつ病増加さらに自殺者も上昇。」いままでも似たような記事はなんとなく眼にしていたが、その記事はうつ病の原因として、携帯電話による嫌がらせが増えているという事が書いてあった。1日に何度となくかかってくる無言電話、怒鳴るだけの電話でノイローゼからうつ病を発症する人が増えているらしい。という事で記事は終っていた。

俺は無言で黙っていた。いままで続けてきたバイトがこんな結果を引き起こしているなんて想像もできなかった。確かに俺からの電話は1日に1回かもしれないが、他にも同じようなバイトが10人いれば1日10回、100人いればと考ただけで恐ろしくなってきた。

いい加減お金も貯まったしバイトはいつ辞めてもいい状態だったので、バイト先に「バイトを辞めたい。」とメールしてみたところ、あっさりと辞める事ができた。

ただ、そのご毎日頻繁に無言電話や怒鳴られる電話、嫌がらせメールがくるようになっていた。そろそろ限界かもしれない・・・